

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 5

— 柏市原山遺跡 —

縄文時代以降編

平成25年3月

千葉県土整備部
公益財団法人 千葉県教育振興財団

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 5

— 柏市原山遺跡 —

縄文時代以降編



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第699集として、千葉県県土整備部による、柏北部中央地区土地区画整理事業（公共つくばエクスプレス沿線整備委託）に伴って実施した、柏市原山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文海進から海退に向かう縄文時代前期中頃の谷奥の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 渡 邁 清 秋

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部による公共つくばエクスプレス沿線整備委託事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、柏市若柴字原山 276-1 ほかに所在する原山遺跡（遺跡コード 217-032）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受けて、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の実施期間及び担当者は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は平成 20 年度に主席研究員 鈴木定明、主席研究員 伊藤智樹が、平成 24 年度に主任上席文化財主事 四柳 隆が行い、編集は主任上席文化財主事 落合章雄、四柳が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部、柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
 - 第1・4図 千葉県県土整備部発行 1:500 地形図 21・22・25・26（平成9年測量）
 - 第3図 柏市都市計画課発行 1:2,500 都市計画図 11・17（平成5年3月修正測量）
 - 第5図 国土地理院発行 1:25,000 地形図「流山」(NI-54-25-1-2)（平成17年8月発行）
- 8 本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。
 - 図版1 京葉測量株式会社撮影（昭和48年3月）
- 9 本書で使用した図面の方針はすべて座標北であり、測量系は日本測地系による。
- 10 掃図に使用した遺構、遺物のスクリーントーンや記号の用例は以下のとおりである。
 - 竪穴住居跡内のスクリーントーン：炉
 - 繩文土器断面図のドット：植物纖維混入
 - 土師器のスクリーントーン：赤彩
- 11 遺構番号は、発掘調査時に付けたものを本報告で一部変更して使用した。

本文目次

序文

凡例

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1. 調査に至る経緯と経過.....	1
2. 調査の方法と概要.....	2
第2節 遺跡の位置と環境.....	4
1. 遺跡の位置と地理的環境.....	4
2. 周辺の遺跡.....	6
第2章 検出された遺構と遺物.....	9
第1節 縄文時代.....	9
1. 竪穴住居跡.....	9
2. 磬 群.....	19
3. 土坑・陥穴.....	26
4. 遺構外出土遺物.....	34
第2節 古墳時代以降.....	44
第3章 まとめ.....	45

報告書抄録

挿図目次

第1図 原山遺跡調査区域.....	1	第15図 磺群②	20
第2図 グリッドの呼称例.....	2	第16図 磺群③	22
第3図 柏北部中央地区遺跡分布図.....	3	第17図 SK-001 ~ SK-005	27
第4図 遺構配置図.....	5	第18図 SK-006 ~ SK-010	31
第5図 周辺遺跡分布図.....	7	第19図 SK-011 ~ SK-016	33
第6図 SI-001 (1)	10	第20図 遺構外出土縄文土器 (1)	35
第7図 SI-001 (2)	11	第21図 遺構外出土縄文土器 (2)	37
第8図 SI-002.....	12	第22図 遺構外出土縄文土器 (3)	38
第9図 SI-003.....	13	第23図 遺構外出土石器 (1)	41
第10図 SI-004 (1)	14	第24図 遺構外出土石器 (2)	42
第11図 SI-004 (2)	15	第25図 遺構外出土石器 (3)	43
第12図 SI-005	16	第26図 遺構外出土土師器	44
第13図 SI-006	18	第27図 遺構外出土錢貨	44
第14図 磺群①	19		

表 目 次

第1表 発掘調査一覧.....	1	第3表 周辺遺跡一覧.....	7
第2表 遺構番号対照表.....	4	第4表 磺群観察表.....	23

図版目次

図版1 原山遺跡周辺空中写真	図版8 遺構内出土遺物 (2)
図版2 SI-001・SI-002・SI-003	図版9 遺構外出土縄文土器 (1)
図版3 SI-004・SI-005・SI-006	図版10 遺構外出土縄文土器 (2)
図版4 磺群①・磺群②・磺群③	図版11 遺構外出土縄文土器 (3)・石器 (1)
図版5 SK-001 ~ SK-008	図版12 遺構外出土石器 (2)
図版6 SK-009 ~ SK-016	図版13 遺構外出土石器 (3)・土師器・錢貨
図版7 遺構内出土遺物 (1)	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

千葉県県土整備部は、東京とつくば学園都市とを結ぶつくばエクスプレスの建設に関連して、柏市十余二地区・若柴地区・正蓮寺地区を中心とする柏北部中央地区土地区画整理事業を計画した。つくばエクスプレスの新駅である、柏の葉キャンパス駅の周辺整備事業である。事業の実施に先立つて、千葉県県土整備部より千葉県教育委員会へ計画地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会された。これを受け千葉県県土整備部及び千葉県教育庁教育振興部文化財課の両者により慎重な協議が重ねられた結果、所在する埋蔵文化財は可能な限り緑地などとして現状保存を図ることとし、一方で現状保存が困難な範囲についてはやむをえず記録保存の措置を講ずることになった。発掘調査は、千葉県県土整備部が公益財団法人千葉県教育振興財団に委託して実施することになった。



第1図 原山遺跡調査区域

第1表 発掘調査一覧

調査年度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査 (m ²)		本調査 (m ²)	調査期間	調査担当者	調査事務所長	調査研究部長
			上層	下層					
平成13年度	(1)	12,650	1,265	504	0	1,444	平成13年12月3日～平成14年3月29日	木下主司	田坂 浩
	(2)	31,760	—	3,176	1,270	—	平成14年1月7日～平成14年3月29日	川島利道	佐久間 豊
平成14年度	(3)	11,390	—	—	4,471	1,749	平成14年4月8日～平成14年6月27日	川島利道	田坂 浩
	(4)	3,866	—	364	1,142	555	平成15年3月3日～平成15年3月27日	川島利道	森木 勝
平成15年度	(5)	180	20	8	0	0	平成15年6月9日～平成15年6月19日	川島良昭	田坂 浩
	(6)	3,000	296	180	342	324	平成17年1月17日～平成17年2月28日	川島利道	田坂 浩
平成16年度	(7)	10,000	1,377	516	0	937	平成17年3月1日～平成17年3月28日	川島利道	矢戸三男
	(8)	6,000	650	304	0	225	平成17年4月4日～平成17年5月31日	川島利道	田坂 浩
平成17年度	(9)	5,240	664	224	0	0	平成17年12月8日～平成18年1月31日	川島利道	矢戸三男
	(10)	14,500	1,450	684	0	0	平成18年11月17日～平成19年2月26日	土屋潤一郎	田坂 浩
平成19年度	(11)	805	120	36	0	0	平成20年1月16日～平成20年1月28日	柴田龍司	及川淳一
		99,391	10,524	4,525	4,813	8,639			矢戸三男

今回報告する柏市原山遺跡は柏市若柴字原山ほかに所在する。調査対象面積は99,391m²にのぼり、発掘調査は平成13年12月から平成20年1月まで11次にわたって実施した。調査面積は上層確認調査10,524m²・本調査4,813m²、下層確認調査4,525m²・本調査8,369m²である。原山遺跡のうち南端付近の「調査不要」とした範囲は、(9)次から(11)次で実施した確認調査の結果、上下層とも遺構の分布がきわめて希薄であることから、千葉県教育庁教育振興部文化財課が「調査不要」と判断した範囲である。各年度の調査範囲や調査次数・調査内容・調査担当者等は第1図および第1表に示した。

整理作業は平成18年度に着手した。なお、当初から整理作業は上層と下層に分割して実施し、報告書も別々に刊行する方針で作業を進めた。下層分の報告書については、すでに刊行済みである⁽¹⁾。上層についての整理作業の実施期間・内容・担当職員は以下のとおりである。

平成18年度 水洗・注記

調査研究部長 矢戸三男

西部調査事務所長 田坂 浩

平成20年度 記録整理～原稿の一部

調査研究部長 大原正義

副部長兼整理課長 高田 博、主席研究員 鈴木定明・伊藤智樹

平成24年度 原稿の一部～報告書刊行

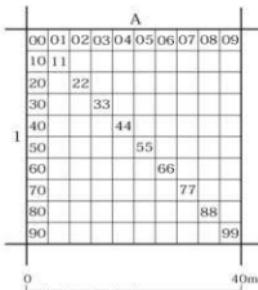
調査研究部長 関口達彦

調査2課長 橋本勝雄、主任上席文化財主事 落合章雄・四柳 隆

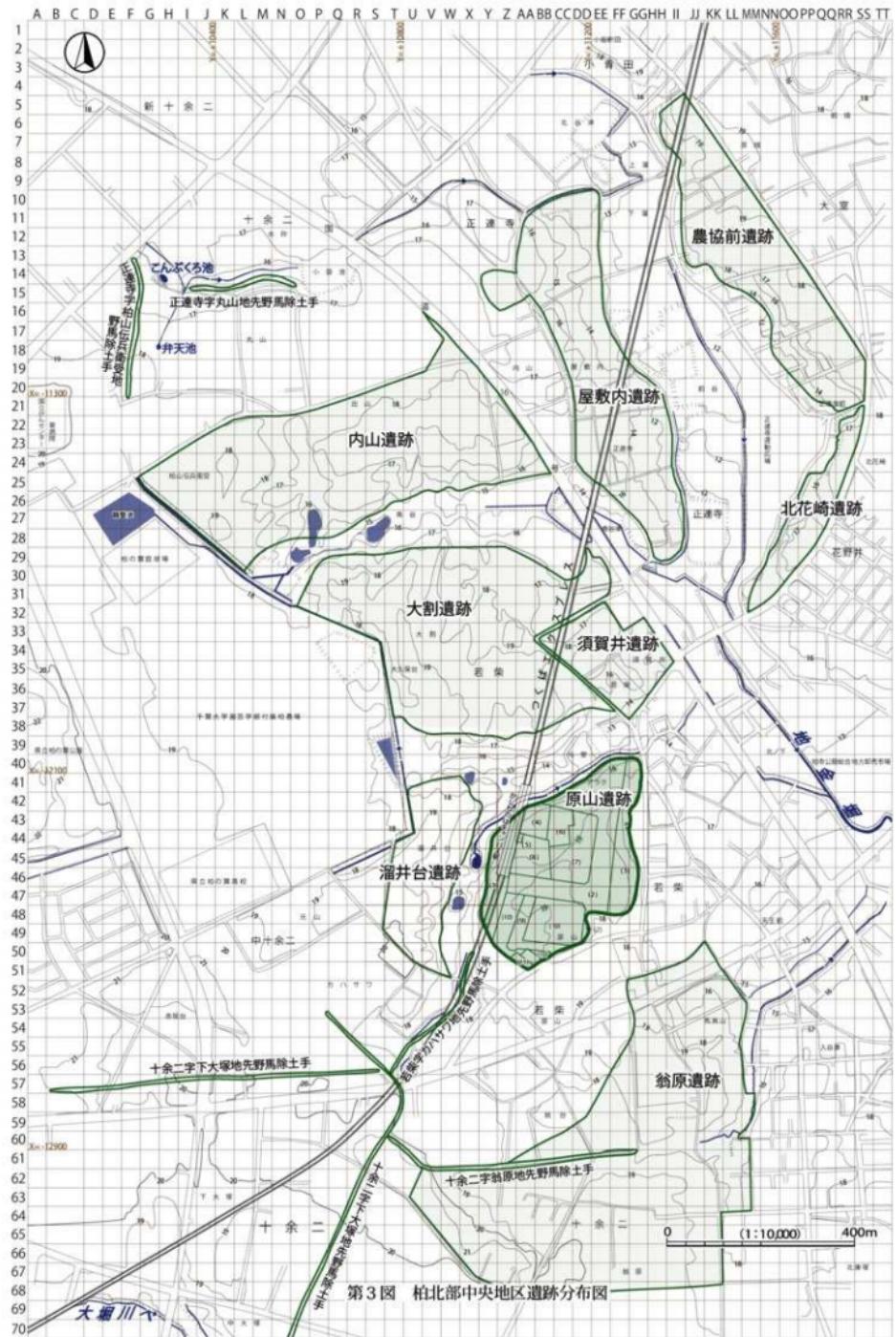
2. 調査の方法と概要

調査にあたっては、国土方眼座標（第IX座標系）を基準に調査区（グリッド）の設定を行った。柏北部中央地区土地区画整理事業地内に所在するすべての調査対象遺跡と重複するように40m×40mの方眼網を設定してこれを大グリッドとし、北西端を起点に東西方向を西からA・B・C…、南北方向を北から1・2・3…としてこれを組み合わせて呼称することとした（第3図）。こうして設定した大グリッドのうち、原山遺跡は東西方向でYからGGグリッド、南北方向で40から51グリッドにあたる。つづいて、この40m四方の大グリッドを4m×4mの小グリッドに100分割し、やはり北西端を起点として西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…と呼称することとした。大グリッド内の小グリッドは、北西端が00、北東端が10、南西端が90、南東端が99となる（第2図）。調査時にはこの大グリッドと小グリッドを組み合わせて、1A-00のように呼称した。

上層の調査は、はじめに調査対象面積の10%を目安としてトレントを設定し、遺構の有無や分布状況、遺構の種類や時期などを把握するための確認調査を実施した。確認トレントは各調査次の調査範囲の形状や地形に即して設定したため、先の方眼網に沿っていない場合もある。確認調査面積は、拡張して調査した範囲も含めて10,524m²（10.6%）である。確認調査の結果検出された遺構が希薄であった場合は、適



第2図 グリッドの呼称例



第3図 柏北部中央地区遺跡分布図

宜トレーナーを拡張して遺構の精査を行い、確認調査の範囲内で終了とした。遺構が広範囲に分布することが確認された場合には、本調査範囲を決定して調査を継続した。原山遺跡は終戦時まで旧日本陸軍が使用していた柏飛行場の跡地にあたり、戦後は柏ゴルフ俱楽部のコースとなっていたため、大幅な地形改変が行われている可能性が高く、当初から遺構や遺物の遺存はあまりよくないと予想されていた。上層確認調査の結果、本調査が必要と判断されたのは調査対象面積 99.391m²のうち(2)次 4,471m²と(6)次 342m²、計 4,813m²と全体の 5%に満たず、おおむね当初の予想どおりとなった。検出された遺構は縄文時代前期前半の竪穴住居跡 6軒をはじめ縄群 3か所・陥穴を含む土坑 16基である。これらの遺構の分布密度は高くないが、台地の中央やや北東寄りにまとまる傾向がうかがえた。出土遺物はほとんどが縄文時代前期前半の黒浜式土器であり、ほかの時期の資料はわずかであった。

下層の調査は、上層調査の終了後、調査対象面積の 4%を目安に 2m × 2m のグリッドを設定して確認調査を行い、石器が出土したグリッドについて拡張し、遺物が集中する地点については本調査に移行した。確認調査面積は拡張範囲も含めて 4,525m²(4.6%)で、その結果 8,639m²(8.7%)について本調査を実施し、5 時期の文化層と 52 か所のブロックから、計 1,000 点を超える石器類が検出された。詳細については既刊の下層分の報告書⁽¹⁾を参照されたい。

第2節 遺跡の位置と環境

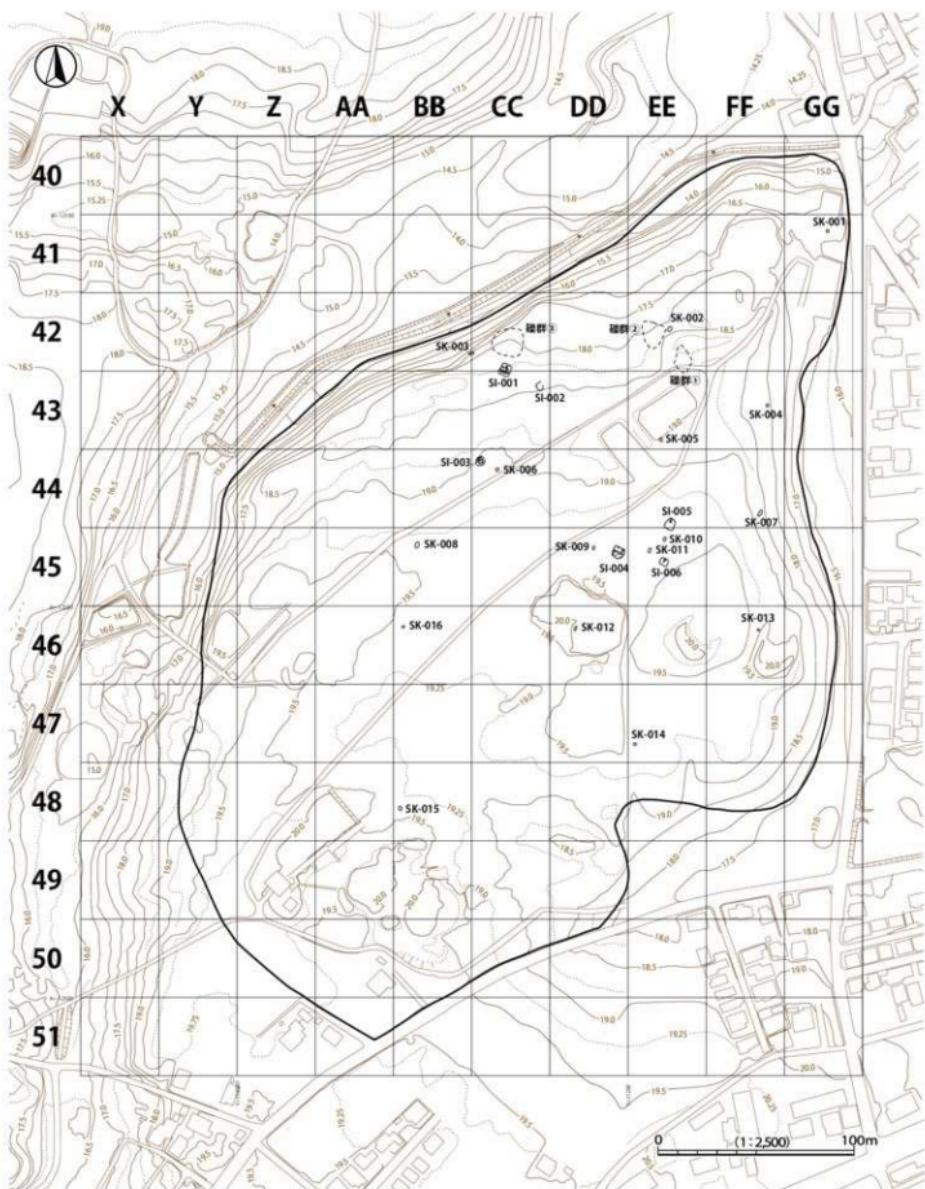
1. 遺跡の位置と地理的環境

原山遺跡の所在する千葉県柏市は、千葉県の北西部、東京都心から 30km 圏内に位置するベッドタウンで、その利便性から近年の人口の増加が著しい。平成 17 年 3 月には隣接する沼南町を合併し、現在の人口は約 40 万人で、平成 20 年 4 月には船橋市に次いで県内で 2 番目の中核市となっている。行政的にみると、西側は北から野田市・流山市・松戸市と、東側は我孫子市・印西市と、南側は鎌ヶ谷市・白井市と市境を接し、北側は東流する利根川を介して茨城県と接している。

地形的みると下総台地の北西端にあたり、市域北端を流れる利根川に向かって次第に標高を減じる傾向にあるが、最も標高の高い市域南部の酒井根地区や沼南高柳地区で 30 m 前後、利根川沿岸の沖積地で

第2表 遺構番号対照表

報告番号	調査次	調査時	遺構種別	グリッド	報告番号	調査次	調査時	遺構種別	グリッド
SI-001	(6)	SI-002	竪穴住居跡	42CC-94	SK-008	(8)	SK-002	土坑(竪穴)	45BB-22
SI-002	(6)	SI-003	竪穴住居跡	43CC-28	SK-009	(7)	SK-002	土坑	45DD-25
SI-003	(6)	SI-001	竪穴住居跡	44CC-11	SK-010	(2)	SK-005	土坑	45EE-14
SI-004	(7)	SI-001	竪穴住居跡	45DD-38	SK-011	(2)	SK-004	土坑(竪穴)	45EE-22
SI-005	(2)	SI-002	竪穴住居跡	44EE-95	SK-012	(7)	SK-001	土坑(竪穴)	46DD-33
SI-006	(2)	SI-001	竪穴住居跡	45EE-44	SK-013	(3)	SK-001	土坑	46FF-36
SK-001	(3)	SK-004	土坑	41CG-25	SK-014	(2)	SK-006	土坑	47EE-70
SK-002	(2)	SK-013	土坑(竪穴)	42EE-45	SK-015	(9)	SK-001	土坑(竪穴)	48BB-50
SK-003	(2)	SK-011	土坑(竪穴)	42BB-79	SK-016	(8)	SK-001	土坑	46BB-21
SK-004	(3)	SK-003	土坑	43FF-47	縄群①	(2)	B 区	縄群	42EE-86
SK-005	(7)	SK-003	土坑(竪穴)	43EE-84	縄群②	(2)	C 区	縄群	42EE-53
SK-006	(6)	SK-001	土坑	44CC-23	縄群③	(2)	D 区	縄群	42CC-54
SK-007	(3)	SK-002	土坑(竪穴)	44FF-86					



第4図 遺構配置図

10 m弱とその差は小さく、おおむね平坦であるといってよかろう。利根川のほか大堀川や大津川といった河川や手賀沼に囲まれた市域内には多数の湧水が点在しており、大小の開析谷を形成している。

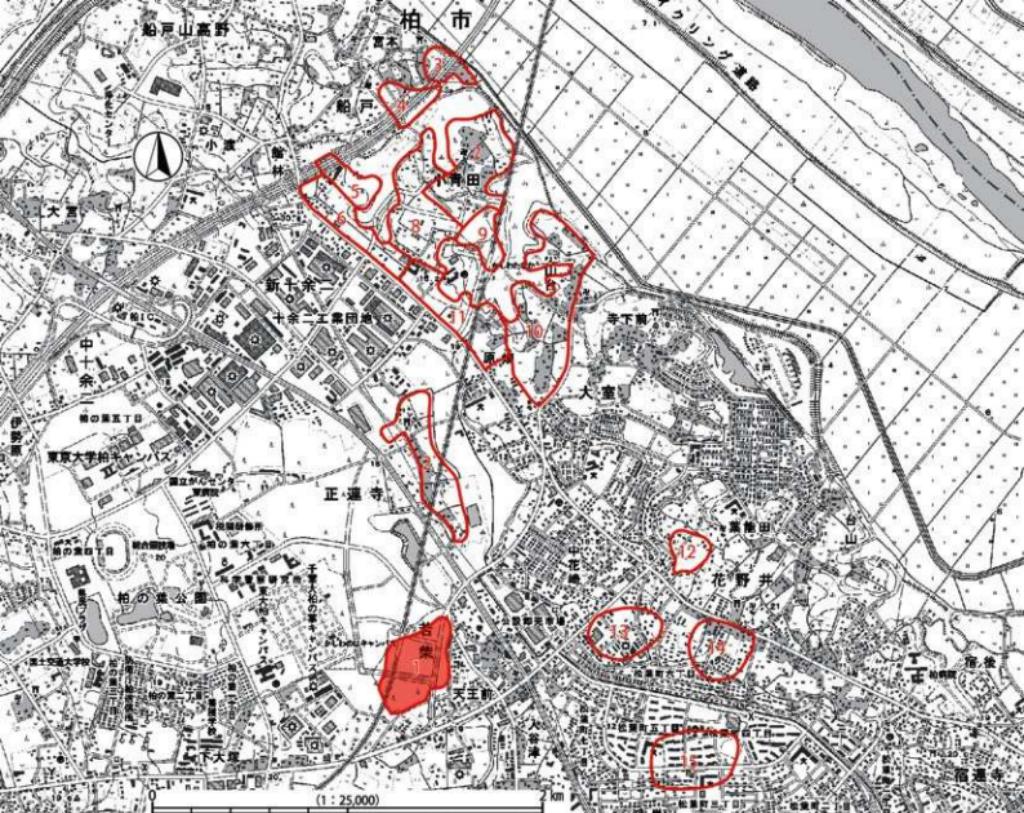
柏北部中央地区土地区画整理事業地の所在する柏市十余二地区・若柴地区・正蓮寺地区は、柏市北部の標高20 m前後の比較的平坦な台地となっている。事業地の中央には、正蓮寺地区に所在するこんぶくろ池や弁天池といった湧水を水源とする地金堀が南流し、標高差7 m～8 mの浅い開析谷を形成している。一方事業地の南側には流山市内に水源を発する大堀川が東流し、多くの樹枝状の小支谷を作り大規模な開析谷を形成している。地金堀と大堀川はJ R 常磐線北柏駅付近で合流し、まもなく手賀沼へと流入する。

原山遺跡は、柏北部中央地区土地区画整理事業地の中央付近やや南寄り、柏市若柴字原山及び字アラクに所在する。地金堀と大堀川の開析谷にはさまれた標高20 m弱の台地上に立地し、東側を流れる地金堀にむかってゆるやかに傾斜している。遺跡の北側から西側には地金堀開析谷から南西に延びる小支谷があり込んでおり、支谷をはさんで北に大割遺跡と須賀井遺跡、西に溜井台遺跡⁽²⁾を望む。遺跡の南側にも西に延びる別の浅い小支谷があり、その南には翁原遺跡が所在する。このほか事業地内の遺跡としては大割遺跡の北側に内山遺跡、国道16号線をはさんでその東側に屋敷内遺跡、さらに地金堀をはさんで東側に農協前遺跡⁽³⁾と北花崎遺跡の計9か所と野馬土手数条が所在している。9遺跡すべてで旧石器時代の資料が出土しているが、上層遺構の分布は概して希薄である。

2. 周辺の遺跡（第5図、第3表）

柏北部中央地区とその周辺の遺跡については、既刊の各報告書で概要が記載されてきたが、いずれも旧石器時代を対象とした内容で縄文時代以降の遺跡について触れたものはない。ここでは、原山遺跡の上層遺構の主体となっている縄文時代前期中葉の黒浜式期を中心に、前期前葉から中葉にかけての周辺の遺跡について概観する。なお、当事業地の北東側にあたる柏市大室地区・大青田地区・小青田地区・船戸地区では、独立行政法人都市再生機構によって柏北部東地区土地区画整理事業が進められており、それに伴って当財団が実施した発掘調査についても整理作業が進捗している。それらのうち柏市駒形遺跡⁽⁴⁾・原畠遺跡⁽⁵⁾・大松遺跡⁽⁶⁾の縄文時代以降を取り扱った報告書をすでに刊行しており、特に原山遺跡と同じ縄文時代前期の黒浜式期を主体とする駒形遺跡・原畠遺跡とは、一部重複した内容であることわざわざおく。

原山遺跡は、平成11年に当財団が提示した水系区分⁽⁷⁾に基づくと、古鬼怒溝区>手賀・印旛沼湾奥部>手賀沼低地（水系ID：II B1）に属する。手賀・印旛沼湾奥部では縄文時代早期後葉から中期前葉にかけて礦水産貝塚が形成されており、特に手賀沼低地は奥東京湾水系からづく縄文時代前期集落跡・貝塚の集中地域の東端となっている。この水系に属する同時期の遺跡としては、柏北部中央地区事業地内に所在する2. 屋敷内遺跡、地金堀をやや下った地点に立地する13. 上前留遺跡^{(8) (9)}・14. 香取神社遺跡・15. 鴻ノ巣（II）遺跡⁽¹⁰⁾などがあげられる。屋敷内遺跡は平成23年度末までに31次にわたる調査を行い、黒浜式期の竪穴住居跡7軒・土坑6基・陥穴3基などが検出されている。なお、屋敷内遺跡の範囲内には周知の遺跡として正蓮寺貝塚が所在していたが、千葉県教育庁教育振興部文化財課と柏市教育委員会文化課との間で協議の結果、屋敷内遺跡に含まれるものとして抹消された。遺構内貝層と思われる地点貝塚として登録されていたが、当財団による発掘調査の結果、周知地点付近からは貝層を持つ遺構は検出されず、すでに破壊されていたと判断された。鴻ノ巣（II）遺跡は北柏地区の土地区画整理事業に伴って調査され、



第5図 周辺遺跡分布図

第3表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	水系	遺跡種別	前期遺構等	備考
1	船山遺跡	柏市若柴字船山	手賀・印旛沼・湊奥部：手賀沼低地	集落跡	黒浜住居6・竪穴8	
2	屋敷内遺跡	柏市正蓮寺字屋敷内	"	集落跡	黒浜住居7・土坑6・窓穴3・遺構内貝塚	日正蓮寺貝塚含む
3	花前I遺跡	柏市船川字花前	古留川・川崎部：柏・我孫子低地	集落跡・貝塚	黒浜住居8・遺構内貝塚	後期前葉集落跡
4	花前II遺跡	柏市船川字新町	"	集落跡	前期後葉集落跡	後期前葉集落跡
5	矢船I遺跡	柏市船川字矢舟ノ船	"	集落跡	前期後葉落跡・土製灰耳飾り出土	矢船遺跡
6	矢船II遺跡	柏市船川字矢舟ノ船	"	集落跡	前期後葉落跡・土坑・竪穴検出	
7	駒形遺跡	柏市小青田字駒形	"	集落跡・貝塚	黒浜住居13以上・遺構内貝塚・竪穴	早期駒形文～沈線文集石・早期条文文～前期後葉集落跡・川端貝塚
8	富士見遺跡	柏市小青田字立山	"	集落跡・貝塚	佐崎下層集落跡・黒浜灘丸貝塚・住居100以上・遺構内貝塚・竪穴	駒形・小青田貝塚
9	大松遺跡	柏市小青田字大松	"	集落跡・貝塚	鴨山II～黒浜集落・住居10以上・遺構内貝塚	中期前葉～後葉抛点集落・大松貝塚
10	小山台遺跡	柏市大室字前畠	"	集落跡・貝塚	黒浜住居10以上・遺構内貝塚・竪穴	中期中葉～後葉抛点集落・前畠貝塚
11	粗畑遺跡	柏市大室字原畠	"	集落跡・貝塚	黒浜住居19・土坑5・遺構内貝塚	
12	寺前遺跡	柏市花野井字寺前	"	集落跡・貝塚	黒浜住居1	
13	上前留遺跡	柏市花野井字上前留	手賀・印旛沼・湊奥部：手賀沼低地	集落跡	黒浜住居3	
14	香取神社遺跡	柏市花野井字西高野	"	集落跡	黒浜住居1	
15	鳴ノ果(II)遺跡	柏市十余二字湖ノ果	"	集落跡・貝塚	黒浜住居20・遺構内貝塚	

豎穴住居跡 20 軒とややまとった集落跡が発見されているが、上前留遺跡では 3 軒、香取神社遺跡では 1 軒とほかの遺跡では分布は散漫である。原山遺跡・屋敷内遺跡にしても調査面積の割には零細な内容であり、谷奥集落の特徴を備えているといえる。

一方、柏北部東地区の遺跡をはじめとする一群は直接利根川の本流に面しており、古鬼怒湾区>古常陸川湾奥部>柏・我孫子低地（水系 ID：II A2）に属する。利根川流路の付け替え以前に小貝川に合流していた常陸川の水系で、縄文海進の最盛期である縄文時代前期前葉には手賀沼低地に関連した谷奥部干潟が形成されていたと考えられている地域である。北から 3. 花前 I 遺跡⁽¹¹⁾・4. 花前 II 遺跡^{(12) (13)}・5. 矢船 I 遺跡・6. 矢船 II 遺跡・7. 駒形遺跡⁽⁴⁾・8. 富士見遺跡・9. 大松遺跡⁽⁶⁾・10. 小山台遺跡・11. 原畑遺跡⁽⁵⁾の各遺跡で縄文時代前期の遺構や遺物が検出されている。特に富士見遺跡では 100 軒以上の豎穴住居跡が調査され、周辺の駒形遺跡や大松遺跡、支谷をはさんで東側の小山台遺跡や原畑遺跡でも各 10 軒以上の当該期の豎穴住居跡が調査されている。各遺跡の集落の特徴を瞥見すると、駒形遺跡では花積下層式や二ツ木式・関山式など前期初頭から黒浜式にかけての資料が充実している、富士見遺跡と大松遺跡は黒浜式を主体としている、花前 I 遺跡と矢船 II 遺跡では黒浜式以降前期後葉の浮島・諸磯式期まで集落が継続するといった特徴がみられる。しかし、限られた地域のなかで黒浜式期に限っても 150 軒を超える豎穴住居跡が検出されており、現在も発掘調査が継続していることに鑑みるとさらに検出例の増加が予想されることから、当該期の拠点的な集落であることは確実である。なお、原畑遺跡の報告では、「多くの遺跡で住居跡を中心に少なからず遺構内貝層が形成されていることも特筆される。」という指摘がなされている⁽⁵⁾。同様の例は手賀沼低地の水系に属する屋敷内遺跡や鴻ノ巣遺跡、柏・我孫子低地水系のやや下流にあたり、鴻ノ巣遺跡や上前留遺跡とは幅のせまい台地をはさんで対峙する 12. 寺前遺跡⁽¹⁴⁾でも確認されていることから、当該地域の特徴のひとつといえよう。

参考文献

- (1) (財) 千葉県教育振興財団 2009『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書2－柏市原山遺跡－旧石器時代編』
- (2) (財) 千葉県教育振興財団 2007『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書1－柏市溜井台遺跡－』
- (3) (財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書3－柏市農協前遺跡－旧石器時代編』
- (4) (財) 千葉県教育振興財団 2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編』
- (5) (財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3－柏市原畑遺跡－縄文時代以降編1』
- (6) (財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4－柏市大松遺跡－縄文時代以降編1』
- (7) (財) 千葉県文化財センター 1999『研究紀要』19
- (8) 柏市教育委員会 1996「上前留遺跡」『柏市埋蔵文化財調査報告書』31
- (9) 柏市教育委員会 2006「上前留遺跡」『柏市埋蔵文化財調査報告書』54
- (10) (財) 千葉県都市公社 1974『柏市鴻ノ巣遺跡』
- (11) (財) 千葉県文化財センター 1984『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』II
- (12) (財) 千葉県文化財センター 1982『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』I
- (13) (財) 千葉県文化財センター 1985『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』III
- (14) 柏市教育委員会 1992「寺前遺跡」『柏市埋蔵文化財調査報告書』22

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 繩文時代

1. 壁穴住居跡

第1章でも触れたとおり、原山遺跡は昭和初期から終戦時にかけては旧日本陸軍の飛行場として、戦後はその跡地がゴルフ場として造成されたため、台地上の多くの部分は平坦になっている。そのため関東ローム層上に築かれた上層遺構の遺存状況は良好とはいえず、すでに削平されて消滅した遺構の存在も想定される。そのようななかで検出された壁穴住居跡は6軒で、いずれも縩文時代前期中葉の黒浜式期に構築されたものである。遺構外出土遺物や表探遺物をみても黒浜式から前期後葉の諸畿・浮島式にかけての資料が大半を占め、ほかには中期前半の阿玉台式土器がわずかにみられる程度であることから、縩文時代において原山遺跡が利用されたのはほぼ黒浜式期を中心とする短期間に限定されると考えられる。これら6軒の壁穴住居跡は、台地中央の平坦部からやや北寄りの緩斜面に構築されている。

SI-001 (第6・7図、図版2・7)

台地の北側に入り込む支谷に面する斜面の肩部、42CC-94～43CC-04 グリッドを中心に位置する。(6)次調査でSI-002として調査された壁穴住居跡である。

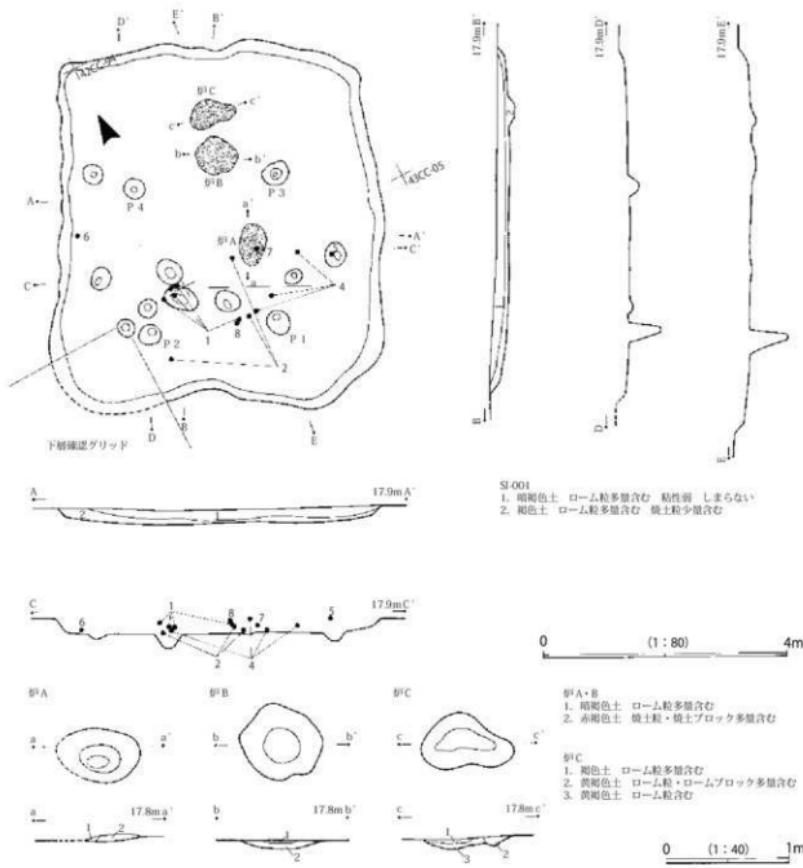
各壁とも直線的でなく、全体ではやや不整な長方形を呈する。南東隅のコーナーはやや隅丸となる。規模は長軸約6.0m、短軸約5.5m、主軸方向はN-28°-Eを示す。

遺構確認面から床面までの深さは約20cmと浅い。住居跡の覆土は2層に分層され、全体的にレンズ状堆積を呈することから自然に埋没したものと思われる。覆土中には、全体にローム粒が多く含まれている。

床面はほぼ平坦で、中央部が踏みしめられて硬化しやや深くなっているがそれほど顕著ではない。床面からは多数のビットが検出されており、このうち南東側のP1と南西側のP2がそれぞれ深さ50cm、60cmとほかのビットよりも深くしっかり掘り込まれていることから、主柱穴である可能性が高い。位置的にみると、北東側のP3と北西側のP4がこれに対応しよう。

炉は3基検出された。このうち1基(炉A)は中央やや南東寄りに、残る2基(炉B・炉C)は北寄りに隣接して設けられている。いずれも形状は不整円形ないし不整橢円形で、掘り込みは10cm前後と浅い。炉A・炉Bでは、覆土中に焼土粒や焼土ブロックの堆積が顕著であった。

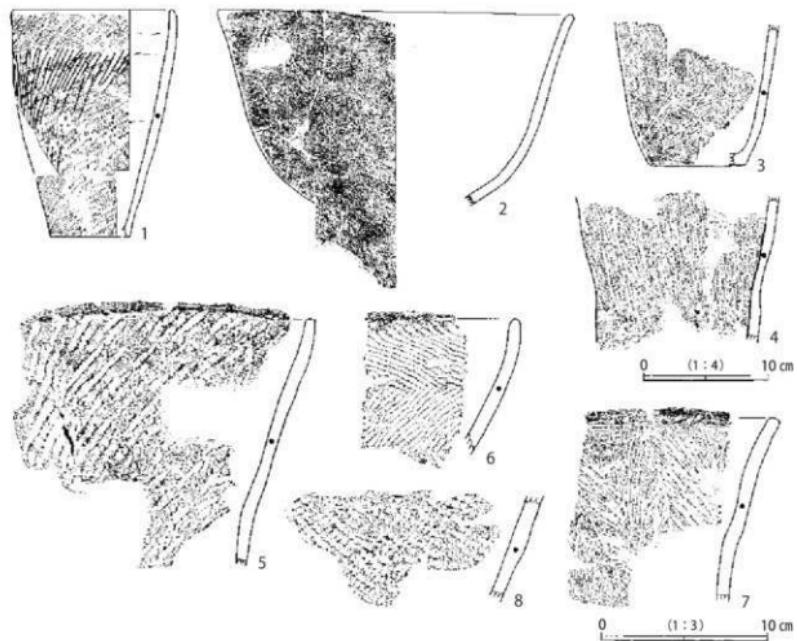
遺物は、住居跡南側の炉A・P1・P2に囲まれた範囲を中心に約35点が出土した。縩文土器の細片が多く、図示できたのは8点である。1は全形が判明した深鉢形土器で、口径12.6cm、底径6.7cm、器高は18.4cmを測る。器壁全体に無節縩文Lが横回転施文され、口縁下3cm程度のところから幅3cm～6cmにわたって先鋭な工具によりひっかいたような短沈線が右上一左下斜位に全周する。この短沈線は、一部胴下部にも及ぶ。工具はこの時期に多用される半截竹管ではなく、平行沈線にはならない。胎土中には植物纖維を大量に含む。2はどんぶり形を呈する鉢形土器で、口径約28cmに復元できた。器壁は無文で、胎土には植物纖維を含まず比較的多量の細砂粒が含まれている。3は深鉢形土器の胴下部から底部にかけての破片で、底径約7.5cmに復元できた。器壁全体に半截竹管による平行沈線が格子目状に施されている。地文は施されない。4は胴部中位のややくびれる部位である。破片上端で径約16cm、下端で径約13cmに



第6図 SI-001 (1)

復元された。器壁全体に半截竹管による平行沈線が縦位に施される。3と同様、地文は施されない。5と6は深鉢形土器の口縁部破片である。5は全体に無節縄文Lが横回転施文される。土器成形後、素地土が未だ軟質のうちに施文したらしく、施文単位の末端に素地土が瘤状に残る部分が認められる。口縁部の整形はていねいで、断面がやや角張った形状となる。6は口縁部直下に無節縄文R、その下位に無節縄文Lが2段にわたって施され、全体では羽状縄文となっている。上位2者の条が交互に入り組んでいることから、羽状縄文は1本に連結された原体が使用されたことがわかる。また、この原体の上下端には縄が解けるのを防止するためにごく細い縄で結束した痕跡が観察できる。7はゆるやかな波状口縁となる可能性がある。

ある。地文は施されず、径3mmほどの細い半截竹管による平行沈線が縦位や斜位に組み合わされて、粗雑な肋骨文とも葉脈文ともいえるような文様となっている。8は胴部中位の破片である。条・節ともに大きい單節繩文R Lしが横回転施文されている。破片上端と中央付近には、不明瞭ながら結節文が横走している。3～8は1と同様胎土中に大量の植物纖維を含んでおり、いずれも黒浜式に比定される。2は胎土の特徴から前期後半の諸磯・浮島式期に属すると思われる。



第7図 SI-001 (2)

SI-002 (第8図、図版2・7)

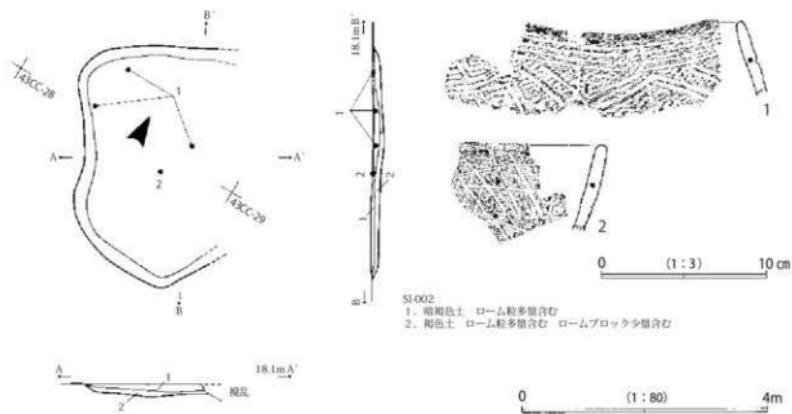
SI-001の東南東約20m、43CC-18～28グリッドを中心に位置する。(6)次調査でSI-003として調査された。

住居跡の東側が大きく搅乱を受けて遺存しておらず、残っている部分でもプランが不明瞭であったが、北壁と西壁はおおむね直線的に、南壁は大きく膨らんで湾曲するラインで検出され、最終的にはやや継長のホームベース形となった。正確な形状は不明といわざるをえないが、規模は遺存部から判断すると長軸約4m、短軸推定3m程度となり、主軸方向は北壁のラインからみるとN-28°-Wとなる。

遺構確認面から床面までの深さは約20cmと浅い。覆土はSI-001とよく似ており、ローム粒を多く含む2層がレンズ状に堆積している。

住居跡中央付近で床がややくぼんでいる部分があるが、踏みしめによる硬化は顕著ではない。炉は搅乱部にあったためか遺存しておらず、遺存部においてもピットなどは検出されなかった。

遺物は縄文土器の細片ばかり約10点が出土し、うち2点を図示した。1は内傾する口縁部形態から、球状を呈する鉢形土器であると思われる。横回転施文された無節縄文しを地文に、口縁部直下に半截竹管による平行沈線を2単位4条めぐらせ、その下位には同一の平行沈線を鋸歯状に横走させている。2は深鉢形土器の口縁部破片である。地文はなく、斜位や横位に沈線が施されるが施文は粗雑で方向は一定していない。格子目状を意識しているようにもみえるが、確実ではない。2点とも胎土中に植物繊維を含む。黒浜式である。



第8図 SI-002

SI-003（第9図、図版2・7）

SI-001から南南西方向に約50mの台地中央部やや北寄りにあり、44CC-10～11グリッドを中心に位置する。(6)次調査でSI-001として調査された。

不整円形を呈することから規模や主軸方向が計測しにくいが、比較的直線的な南壁と2基ある炉の並びを基準にすると長軸4.6m、短軸4.3m、主軸方向はN-3°-Eとなる。

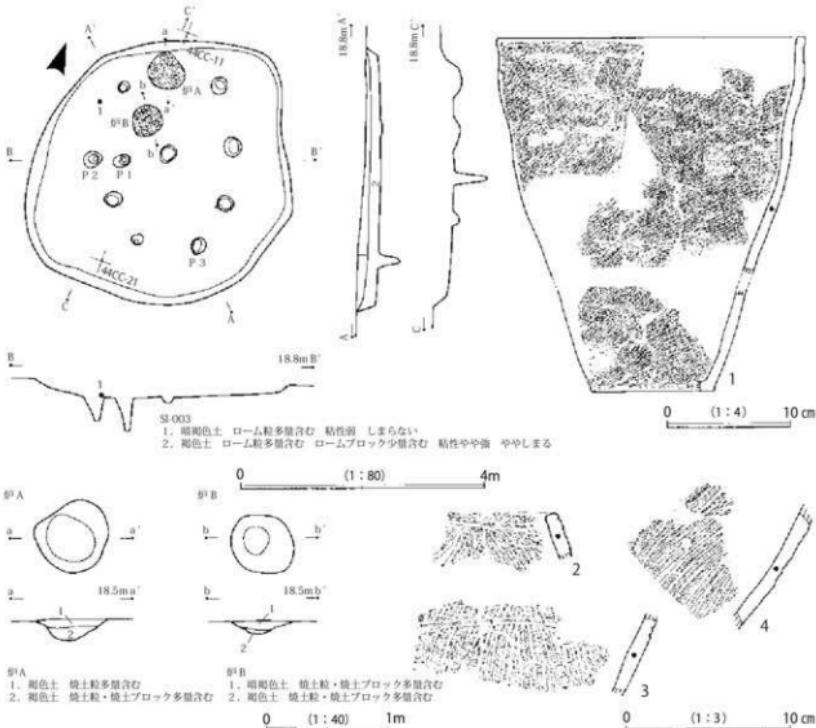
遺構確認面から床面までの深さは約30cmで、覆土はSI-001・SI-002と同様にローム粒の含有量の多い2層がレンズ状に堆積している。

床面はSI-001と同様に中央部が踏みしめられてやや深くなるものの、おおむね平坦である。ピットは計10基が検出され、規模・深さとも一定ではないが、P1～P3の3基は30cm以上の深さにしっかりと掘り込まれていることから主柱穴であった可能性が高い。

炉は住居跡の北壁付近から南北に2基並んで検出された。北側の炉Aは北壁に接するように設けられており、径約60cmの不整円形を呈する。南側の炉Bは整った略円形を呈するが、径約50cmとひとまわり小

さい。深さは炉Aが約18cmと深く、炉Bは約10cmである。いずれも覆土中には多量の焼土粒・焼土ブロックを含み、底面の被熱赤化も顕著である。

遺物は少なく、図示できたのも4点に過ぎない。1は図上で復元できた深鉢形土器で、口径約30cm、底径約10cmと比較的大型である。器壁全体に無節縄文しが施され、胸部中位に数か所、横位の結節文が観察できる。この結節文は部分的に全周しないようであり、確認できるのは施文単位の下端付近であることから、文様として意識的に施されたものではなく、縄が解けるのを防止するための結束の痕跡である可能性が高い。2と3は同一個体と思われる。2は口縁部破片である。内傾するように復元したが、小破片であり確実ではない。口唇部の幅が破片右側ほど厚くなっていることから、あるいは波状口縁になるのかもしれない。縦方向を基本に角度をずらしながら半截竹管平行沈線を施し、集合沈線状の文様となって地文のような効果を持たせている。口縁部直下に半截竹管を右方向に押し引きした平行結節沈線をめぐらせる。3は胸部中位の破片で、文様要素と構成は2と全く同様である。4は胴下部の破片で、集合平行沈線は右上→左下斜位に集約される。4点とも胎土中に植物繊維を含む黒浜式で、2と3は特に器内面の調整がていねいである。



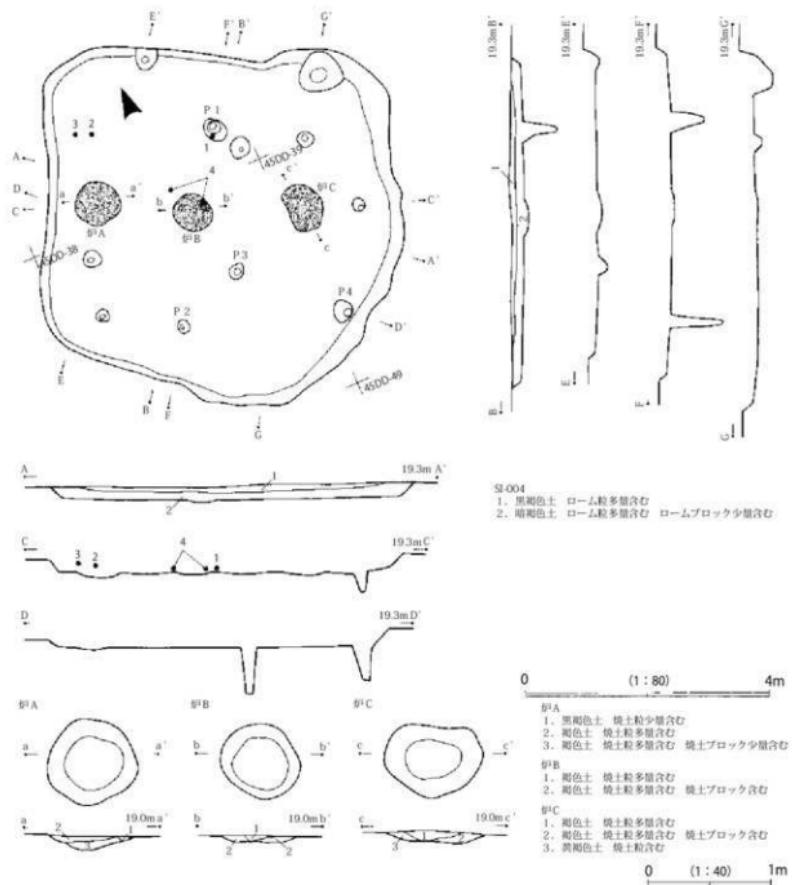
第9図 SI-003

SI-004 (第 10・11 図、図版 3・8)

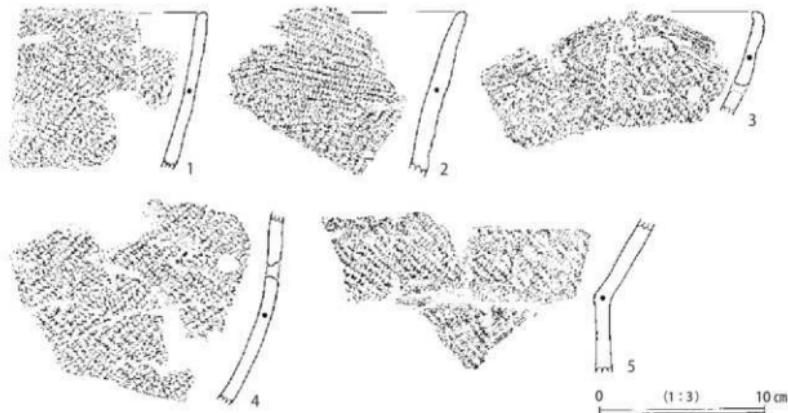
台地中央部やや東寄りの、45DD-28・29・38・39 グリッドに位置する。(7) 次調査でSI-001として調査された堅穴住居跡である。

西側半分は比較的整った隅丸方形を呈するが、東壁をはじめ東側半分は不整形である。規模は長軸 5.9 m、短軸 5.6 m で、主軸方向は炉の並びを基準にすると N-66°-W である。

遺構確認面から床面までの深さは 20cm~30cmで、覆土は SI-001 から SI-003 と同様にローム粒を多く含む層 2 枚がレンズ状に堆積しているが、前の 3 者と比較して全体に暗く黒っぽい傾向がある。



第10図 SI-004(1)

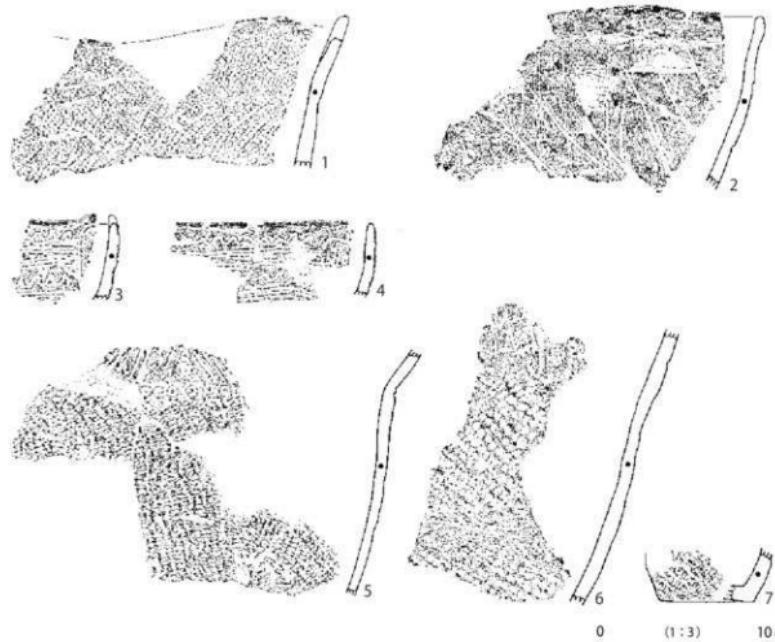
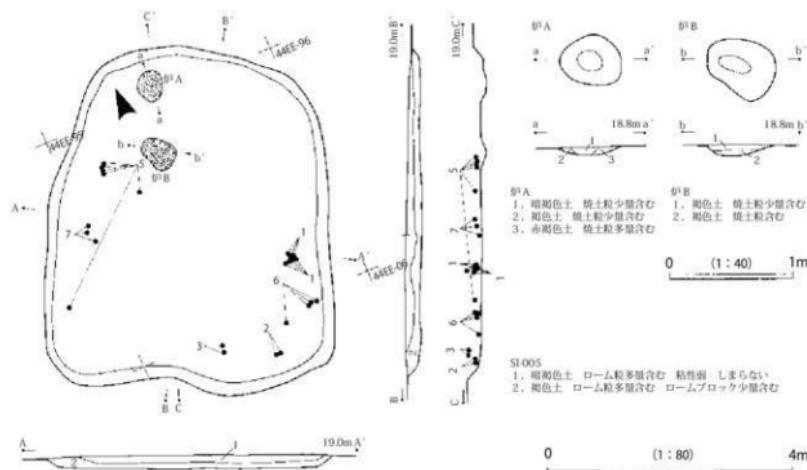


第11図 SI-004 (2)

床面の中央部は踏みしめられて周辺よりもやや深くなっている。床面からは計11基のピットが検出され、うちP1～P4の4基は深さ50cm以上と深く、特にP1とP2はその位置からも主柱穴の可能性が高い。

炉は西壁際（炉A）・中央付近（炉B）・東寄り（炉C）の3基がほぼ等間隔に並んで検出された。形状は炉Aが径約70cm、炉Bが径約60cmの略円形、炉Cは約80cm×約60cmの略楕円形を呈し、深さは炉Aが12cm、炉Bが約5cm、炉Cが約8cmを測る。いずれも覆土中に大量の焼土粒・焼土ブロックを含む。

遺物は約20点出土し、うち5点を図示した。1はわずかに内湾しながら開く深鉢形土器の口縁部破片である。口縁直下と2段目が単節縄文RL、3段目が単節縄文LRの横回転施文で羽状縄文となる。破片下端に再び単節縄文RLが観察できることから、全体では複数段の羽状縄文になると思われる。2は1とは反対にわずかに外反しながら開く深鉢形土器の口縁部破片である。文様構成は同様で、1段目2段目が単節縄文RL、3段目が単節縄文LRの横回転施文で羽状縄文となる。1と比較して原体の擦りが固く、条・節とも器壁に明瞭に現れている。3段目の単節縄文LRは節がやや横長になることから、0段多条の原体である可能性がある。3は波状口縁深鉢形土器の波頂部付近の破片である。口縁に沿って沈線が1条めぐり、その下位に先鋒な工具による刺突列が3段配され口縁部文様帶を構成している。胴部は単節縄文RLが横回転施文されている。破片の右端には補修孔が穿たれる。4は破片の形状からは胴部中位から下部にかけてのようにみえるが、右端に補修孔があることからもっと上方の破片なのかもしれない。器壁全体に単節縄文LRと単節縄文RLが交互に横回転施文され、全体では菱形状の羽状縄文となっている。5は胴部中位のくびれ部の破片である。器壁全体に単節縄文RLが横回転施文されている。施文単位の端に原体の解けを防止する結束の痕跡が観察できる部分がある。5点とも胎土中には大量の植物繊維を混入しており、いずれも黒浜式に比定される。



第12図 SI-005

SI-005（第12図、図版3・8）

台地中央部東寄り、44EE-95 グリッドを中心に位置し、SI-004 とは北東に約 30 m 隔たっている。(2) 次調査で SI-002 として調査された。

形状はおおむね隅丸長方形であるが、北側の方が南側に比べてややすぼまっており隅丸台形ともいえるような形となっている。規模は長軸が 5.6 m、短軸は幅のせまい北壁付近で約 4 m、南側で 4.7 m を測る。主軸方向は N-32°-E である。

遺構確認面から床面までの深さは 20cm 前後で、床面はほぼ平坦である。覆土は SI-001 から SI-004 と同様ローム粒を多く含む 2 層がレンズ状に堆積している。床面からピットは検出されなかった。

炉は住居跡の北寄りから南北に 2 基並んで検出された。北壁際の炉 A は 50cm × 40cm の略楕円形で深さ約 7 cm、南に約 1 m 隔たった炉 B は 55cm × 45cm の不整楕円形で深さは約 10 cm である。覆土は、どちらも焼土粒を含む層で構成されており、特に炉 A の最下層は焼土を主体とする赤褐色土であった。

遺物は比較的多く約 90 点が出土したが、いずれも小破片で、図示できたのは 7 点である。遺物は住居跡の西壁付近と南東隅付近でやまとまって出土した。1 は波状口縁深鉢形土器の口縁部破片で、わずかに外反しながら聞く。文様は単節縄文 L R と単節縄文 R L が交互に横回転施文された菱形状の羽状縄文で、菱形モチーフの位置は波頂部や波底部を意識しているようである。2 は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部外面がわずかに肥厚している。地文はなく、先鋒な工具による沈線が縦位や斜位に施されているが、その施文方向には規則性はうかがえない。3 と 4 は同一個体である。地文はなく、径 3 mm ほどの半截竹管によるコンパス文と横位平行沈線で文様を構成している。口縁部は平縁で、3・4 とも破片右端には小突起が付され、突起に対応して同一の半截竹管平行沈線による逆 U 字状の懸垂文が配されて、前述のコンパス文 + 平行沈線という横方向の文様が区画されている。5 は胴部中位のくびれ部から胴下部にかけての破片で、くびれ部には竹管断面による円形刺突列をめぐらせ、上位と下位の文様帯を画している。上位の文様帯は縦位から斜位の半截竹管平行沈線で構成され、くびれ部と同じ円形刺突列を縦に配して文様帯を区画している。くびれ部から下位は、器壁全体に単節縄文 R L が横回転施文される。破片右下端に施文方向のことなる条がみえるが、これは羽状縄文を意識したものではなかろう。6 も部位としては 5 に類似する。胴部中位にわずかにくびれる部分があり、その上位には縦位の沈線が、下位には太い縫による単節縄文 R L が配されている。全体の文様構成も 5 と類似するのであろう。7 は比較的小型の深鉢形土器の底部である。底径は 5.6 cm で、底部直上まで直前段異東の単節縄文 R L が横回転施文されている。いずれも胎土中に植物纖維を多量含む黒浜式である。

SI-006（第13図、図版3・8）

台地中央部東寄り、45EE-44 グリッドを中心に位置し、SI-004 とは東に約 25 m、SI-005 とは南に約 20 m 隔たっている。(2) 次調査で SI-001 として調査された。SI-004 から SI-006 の 3 軒は位置的にも近接しており、なんらかの有機的な関係が存在した可能性が高い。

形状はやや東西に長い不整長方形で、長軸 4.4 m、短軸は 3.4 m を測る。炉の位置からみると主軸方向は短辺方向とするべきで、N-26°-E である。

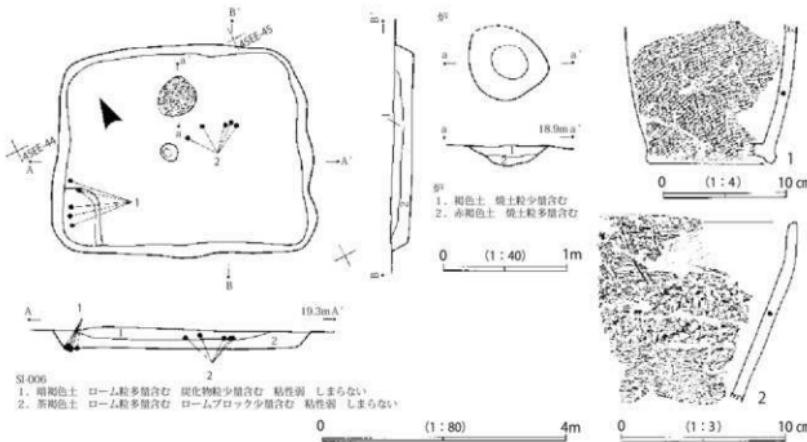
遺構確認面から床面までの深さは約 30 cm で、床面はほぼ平坦である。覆土はほかの竪穴住居跡と同様でローム粒の含有量の多い 2 層がレンズ状に堆積しているが、ほかよりも若干色調が明るく、しまらない

という特徴がある。

床面からは、住居跡のほぼ中央から深さ 20cm ほどの柱穴状のピットが 1 基検出されており、1 本柱の建物であった可能性がある。住居跡の南西隅からは 1.0 m × 0.6 m の長方形で深さ 10cm ほどの落ち込みが検出された。性格は不明であるが、この落ち込みの覆土中と周辺から 1 の土器が出土している。

炉は住居跡の中央北寄り、柱穴状のピットと北壁の間で検出された。形状は径 60cm～70cm の不整円形で、深さは約 15cm、覆土中には大量の焼土が堆積していた。

遺物は 67 点と、住居跡全体からやまとった数が出土しているが、図示できたのは 2 点に過ぎない。1 は先述のとおり住居跡南西隅の落ち込み内とその周辺から出土したもので、深鉢形土器の底部付近の破片である。底径は 10.4cm で、縄文時代前期の纖維土器に特有な上げ底を呈する。文様は、器壁全体に単節縄文 L R が横回転施文される。2 はわずかに内湾しながら開く深鉢形土器の口縁部破片である。破片の上位 1/3 は縦位の短沈線がまばらに施され、中位の 1/3 には条の太い無節縄文 L が横回転施文され、下位の 1/3 は無文である。2 点とも胎土中に植物纖維を大量に含む黒浜式である。

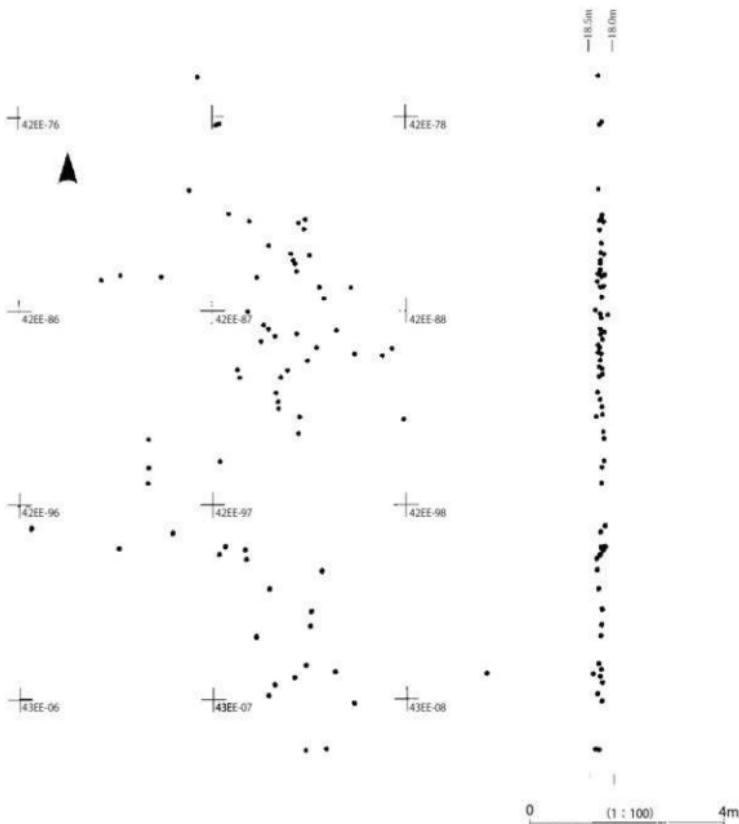


第 13 図 SI-006

2. 磺 群

台地の北側に入り込む深い支谷に面する斜面の肩部から、台地の北東先端部にかけての緩斜面上で、縄文時代の磺群が3か所検出された。これらは、平面的にみると旧石器時代第Ⅱ b 文化層第21～29ブロック、第Ⅳ b 文化層40～46ブロック、第Ⅳ c 文化層47～50ブロックなどに囲まれるような範囲から検出されているが、少量ながら磺や石器類を伴っていることや層位的に立川ローム層第Ⅲ層上面より上位で検出されていることなどから、縄文時代の磺群と判断したものである。

なお、磺群の分布図中、黒点は磺や石器類を、白三角点は土器類を示す。

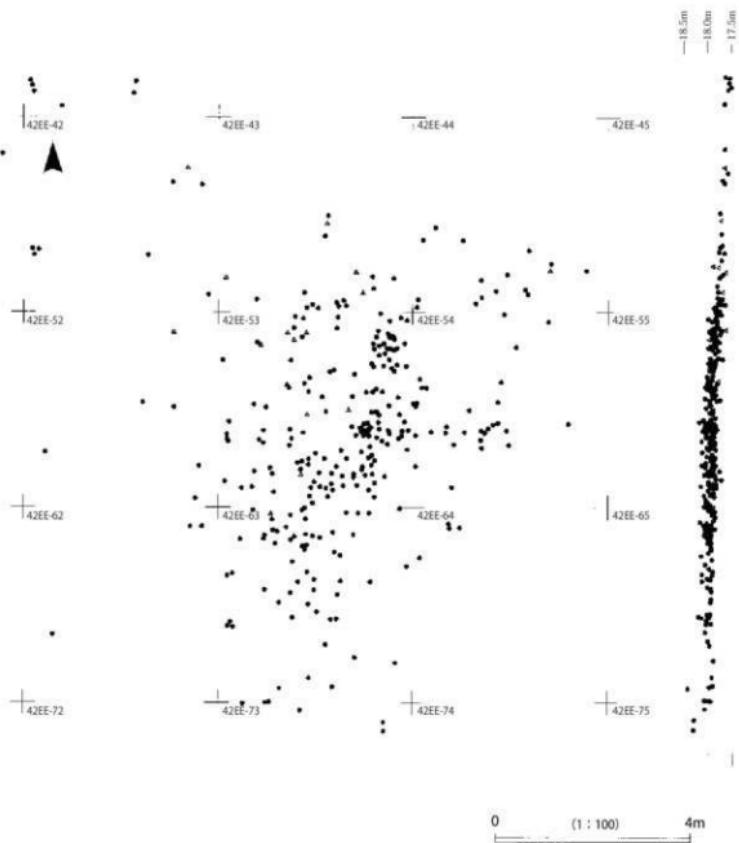


第14図 磺群①

礫群①(第14図、第4表、図版4)

42EE グリッドの南東寄り、42EE-77・87・97 グリッドを中心南北約15m、東西約10mの範囲から84点の礫が出土した。(2)次調査で上層調査区B区として調査された礫群である。84点というのは取り上げた礫の総数で、数点を一括して取り上げたものもあるので、分布図に示したドットの数はこれよりもやや少ない。

礫群①の特徴としては、まず石材のうち片麻岩が39点(46%)と最も多い点があげられる。片麻岩は礫群②や礫群③では数点ずつしか出土していない。また39点のうち21点(54%)に被熱の痕跡が認め



第15図 磕群②

られ、これは礫群①全体の被熱率が38%であるのに対して、かなりの高率である。片麻岩に次いで多く含まれているのは流紋岩26点(31%)で、この2種の石材だけで全体の77%を占めている。もうひとつの特徴として、閃緑岩を組成する点があげられる。点数こそ8点(10%)と少ないが大型の礫片が多く、重量比では礫群①で最大である。すべて同一の母岩と判断され、かなり大きな石塊が持ち込まれたことがわかる。なお、完形を保っていたのはチャートの小礫1点で、これとても混入品である可能性の高いものである。

土器は含まれておらず時期の判断は難しいが、北西に約20mを隔てた地点に隣接する礫群②では、後述するように縄文時代中期阿玉台式土器が数点共伴している。

礫群②(第15図、第4表、図版4)

42EEグリッドの中央付近や西寄り、42EE-53・54・63を中心に東西・南北とも約13mの範囲から347点にのぼる礫が出土した。(2)次調査で上層調査区C区として調査された礫群である。原山遺跡の縄文時代礫群のなかでは最大規模である。出土点数が多いこともあろうが、垂直分布の高低差は最大で約50cmに及ぶ。

礫群②の最大の特徴は、347点のうち実に276点(80%)が流紋岩で組成されている点である。またその多くが被熱により破碎して10g以下の小礫片となっている。被熱しているものの点数は全体で223点(64%)にのぼり、礫群①(38%)や礫群③(31%)と比較して圧倒的に被熱率が高い。礫として完形を保っているものは1点も含まれていなかった。

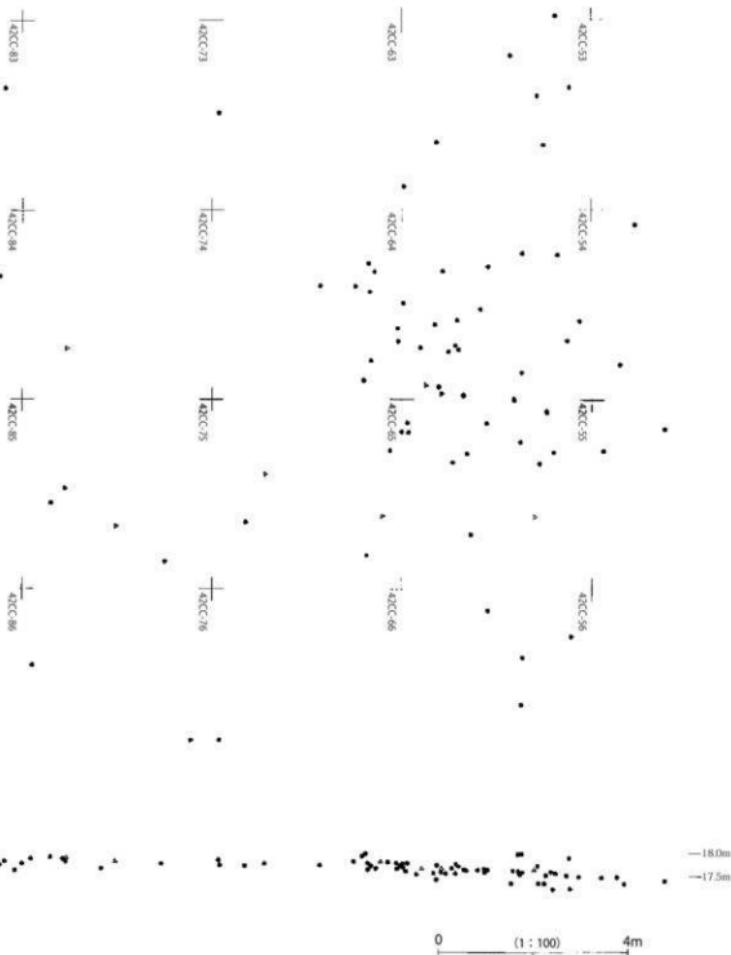
礫群②には、分布図に示したもの15点、一括で取り上げた遺物のなかに含まれていたもの9点、計24点の土器片が含まれていた。大半が小破片で時期の判別ができることが多いが、判別できるものはいずれも阿玉台式の範疇に含まれるもので、8点にのぼる。また、ほとんどの破片は器壁が荒れてろくなっており、これも二次的に被熱した影響と考えられる。

礫群③(第16図、第4表、図版4)

42CCグリッドの中央付近や南寄り、42CC-54・55・64グリッド付近を中心南北約16m、東西20mの範囲から80点の礫が出土した。(2)次調査で上層調査区D区として調査された礫群である。範囲は3か所の礫群中最大であるが、分布は散漫である。近接している礫群①と礫群②とは西に約70mを隔てており、SI-001の北側に隣接するように位置する。

礫群③の特徴としては、まず礫のみではなく剥片類を組成する点があげられる。80点のうち19点が剥片であり、そのうち17点は石材がチャートである。剥片といつてもいずれも小さなもので、なかには碎片ともいいくべきものも含まれている。定型的な剥片石器や大型の剥片は含まれない。もう1点の特徴として、比較的完形礫の割合が高い点があげられる。礫群①と礫群②をあわせて1点が認められるに過ぎなかったが、礫群③では61点中6点(10%)が完形で出土している。

また、礫群②と同様、礫群③からも縄文土器片が出土している。分布図に示したもの7点、一括遺物に含まれていたもの1点の計6点とわずかで、時期の判別できる3点はいずれも黒浜式であった。



第 16 図 碓群③

第4表 磁群観察表

(磁群①)

No.	アリット P	回数	重量(g)	石 材	形態	地 帯	備 考	(磁群①)
1	42EE-65	0001	186.0	石英岩		石炭斑?		
2	42EE-66	0001	28.5	石英岩		1		
3	42EE-76	0002	60.2	石英岩		1		
4		0003	40.1	石英岩				
5		0004	32.1	石英岩				
6		0005	158.9	石英岩				
7	42EE-77	0002	7.0	石英岩		1		
8		0003	5.7	石英岩		1		
9		0004	39.7	石英岩				
10		0005	119.9	石英岩				
11		0006	12.5	石英岩				
12		0007	23.6	石英岩		1		
13		0008	21.9	石英岩				
14		0009	27.9	石英岩		1		
15		0010	10.7	石英岩				
16		0011	150.0	石英岩				
17		0012	15.6	石英岩		1		
18		0013	282.4	石英岩		大型		
19		0014	19.5	石英岩		1		
20		0015	38.4	石英岩				
21		0016	30.8	石英岩				
22		0017	65.6	石英岩				
23		0018	85.9	石英岩		1		
24		0019	27.5	石英岩				
25	42EE-78	0001	127.3	石英岩				
26	42EE-65	0002	27.1	石英岩		1		
27		0003	8.6	石英岩				
28		0004	99.6	石英岩		1		
29		0005	4.7	石英岩				
30		0006	33.2	#カルテ	1			
31	42EE-97	0003	70.5	石英岩				
32		0004	32.0	石英岩		1		
33		0005	78.2	石英岩		1		
34		0006	131.1	石英岩				
35		0007	47.5	石英岩		1		
36		0008	48.7	石英岩				
37		0009	65.5	石英岩		1		
38		0010A	19.1	石英岩		±点一筋		
39		0010B	10.6	石英岩		±点一筋		
40		0011	51.8	石英岩				
41		0012	63.6	石英岩		±点一筋		
42		0013	64.6	石英岩				
43		0014	19.6	石英岩				
44		0015	19.5	石英岩		1		
45		0016	20.2	石英岩		1		
46		0017	29.1	石英岩		1		
47		0018A	410.3	石英岩		±点一筋		
48		0018B	100.4	石英岩		±点一筋		
49		0018C	6.2	石英岩		±点一筋		
50		0019	1.0	石英岩		±点一筋		
51		0020	0.4	石英岩		±点一筋		
52		0019	86.5	石英岩		1		
53		0020	15.7	石英岩		1		
54		0021	105.7	石英岩		1		
55		0032	20.4	石英岩				
56		0032	20.6	石英岩				
57		0032A	14.3	石英岩				
58		0035	5.2	石英岩				
59		0026A	206.2	石英岩		1		
60		0026B	43.8	石英岩		1		
61		0026C	7.7	石英岩		1		
62		0028D	6.5	石英岩		1		
63	42EE-96	0002	1.8	石英岩				
64		0003	29.4	石英岩				
65		0004	65.5	石英岩				
66	42EE-97	0002	271.7	石英岩		1		
67		0003	19.5	石英岩		1		
68		0004	5.0	石英岩		1		
69		0005	41.4	石英岩		1		
70		0006	277.0	石英岩				
71		0007	9.4	石英岩				
72		0008	188.4	石英岩				
73		0009	37.7	石英岩				
74		0010	17.0	石英岩		1		
75		0011	43.5	石英岩		1		
76		0012	14.5	石英岩		1		
77		0013	46.7	石英岩				
78		0014	15.9	石英岩				
79		0015	350.0	石英岩				
80		0016	14.5	石英岩		1		
81	42EE-98	0001	294.3	石英岩				
82	42EE-97	0002	798.6	石英岩				
83		0003	37.0	石英岩				
84		0004	20.5	石英岩		1	32	

No.	グリッド	面番号	重積(g)	G	材	形態	地 帯	備 考
1	42EE-32	0001	3.2		石英岩		1	
2		0002	7.8		石英岩			
3		0003	6.1		石英岩		1	
4		0004	1.0		石英岩		1	
5		0005	2.8		石英岩			
6		0006	0.5		石英岩			
7	42EE-33	0001	0.4		石英岩			研磨
8	42EE-35	0002	2.3		石英岩			
9	42EE-41	0002	2.3		石英岩			
10		0003	1.4		石英岩		1	
11	42EE-42	0003	9.2		石英岩			
12		0004	21.6		石英岩			研磨
13		0005	7.9		(石英岩)			研磨(表面なし)
14		0006	10.3		石英岩			
15		0007	0.7		石英岩			
16		0008	2.9		石英岩			
17		0009	8.4		石英岩			
18	42EE-43	0001	7.2		石英岩			
19		0002	21.7		石英岩			
20		0004	15.2		石英岩			
21		0005	1.7		石英岩			
22		0006	8.0		石英岩			
23		0007	3.2		石英岩			
24		0008	88.8		石英岩			
25		0009	10.4		石英岩			
26		0010	1.5		石英岩			
27		0011	8.0		石英岩			
28		0012	1.8		石英岩			
29		0015	36.3		石英岩			
30		0016	1.9		石英岩			
31		0017	3.2		石英岩			
32		0019	29.5		石英岩			
33	42EE-44	0001	6.8		石英岩			
34		0003	4.4		石英岩			
35		0004	7.8		石英岩			
36		0005	8.0		石英岩			
37		0006	6.9		石英岩			
38		0007	45.0		石英岩			
39		0008	54.1		(石英岩)			
40		0009	10.1		石英岩			
41		0010	2.7		石英岩			
42		0011	11.8		石英岩			
43		0012	12.4		石英岩			
44		0013	6.1		石英岩			
45		0014	1.1		石英岩			
46		0015	4.1		石英岩			
47		0016	4.0		石英岩			
48		0017	5.1		(石英岩)			トロトロ化 無鉄錆
49	42EE-51	0002	10.0		石英岩			
50	42EE-52	0003	10.0		石英岩			
51		0004	2.2		石英岩			
52		0005	0.6		石英岩			
53		0006	1.6		石英岩			
54		0007	1.7		石英岩			
55	42EE-53	0001	2.0		石英岩			
56		0002	11.2		(石英岩)			
57		0003	5.1		(石英岩)			
58		0004	36.2		(石英岩)			
59		0005	24.2		門型岩			
60		0006	0.6		石英岩			
61		0007	14.0		門型岩			
62		0008	1.5		石英岩			
63		0009	0.6		石英岩			
64		0010	2.8		石英岩			
65		0011	1.8		(石英岩)			
66		0013	6.2		石英岩			
67		0014	0.9		石英岩			
68		0015	2.3		石英岩			
69		0016	3.7		石英岩			
70		0017	5.2		(石英岩)			
71		0018	6.3		門型岩			
72		0019	3.1		(石英岩)			
73		0020	2.6		石英岩			
74		0021	1.2		石英岩			
75		0023	1.5		石英岩			
76		0024	0.9		石英岩			
77		0025	1.4		石英岩			
78		0027	1.1		石英岩			
79		0028	3.1		石英岩			
80		0029	21.5		(石英岩)			
81		0030	1.1		石英岩			
82		0032	0.9		石英岩			
83		0034	1.2		石英岩			
84		0035	8.9		石英岩			
85		0037	4.3		石英岩			
86		0040	1.1		(石英岩)			
87		0041	4.9		(石英岩)			トロトロ化 無鉄錆
88		0043	1.0		石英岩			
89		0045	9.7		石英岩			

(礫群②-2)

No.	グリッド	出露番号	高さ (m)	石	材	完熟	被熟	腐	可
90		0049	2.0	漂砾岩		1			
91		0050	4.4	漂砾岩					
92		0051	3.1	漂砾岩					
93		0052	1.7	漂砾岩		1			
94		0053	1.6	漂砾岩					
95		0054	5.7	漂砾岩					
96		0055	5.1	漂砾岩					
97		0056	0.4	漂砾岩					
98		0057	0.5	漂砾岩					
99		0058	7.7	漂砾岩		1			
100		0059	5.7	漂砾岩					
101		0060	3.3	漂砾岩		1			
102		0061	3.1	漂砾岩					
103		0062	4.0	漂砾岩		1			
104		0064	2.6	漂砾岩		1			
105		0065	1.9	漂砾岩		1			
106		0066	2.7	漂砾岩		1			
107		0067	2.3	漂砾岩		1			
108		0068	2.2	漂砾岩					
109		0069	2.53	漂砾岩					
110		0070	47.2	漂砾岩		1			
111		0071	11.7	漂砾岩		1			
112		0072	26.0	漂砾岩					
113		0073	9.3	漂砾岩		1			
114		0074	4.6	漂砾岩					
115		0075	0.7	漂砾岩					
116		0076	0.6	漂砾岩		1			
117		0077	3.8	漂砾岩		1			
118		0078	1.9	漂砾岩		1			
119		0079	4.5	漂砾岩		1			
120		0080	9.4	漂砾岩		1			
121		0081	13.9	漂砾岩		1			
122		0082	33.7	漂砾岩					
123		0083A	12.0	漂砾岩		2点・積			
124		0083B	7.0	漂砾岩		2点・積			
125		0084	1.6	漂砾岩					
126		0085	4.6	漂砾岩					
127		0086	0.3	漂砾岩					
128		0087	117.9	漂砾岩					
129		0088	0.3	漂砾岩		1			
130		0089	273.1	漂砾岩		石柱群?			
131		0090	3.5	漂砾岩		1			
132		0091	48.0	漂砾岩		1			
133		0092	6.0	漂砾岩		1			
134		0093	10.4	漂砾岩					
135		0094	9.4	漂砾岩		1			
136		0095	1.6	漂砾岩		1			
137		0096	7.5	漂砾岩		1			
138		0097	3.6	漂砾岩		1			
139		0098	9.2	漂砾岩					
140		0099	0.2	漂砾岩		1			
141		0100	8.5	漂砾岩					
142		0101	8.2	漂砾岩					
143		0102	10.2	漂砾岩		1			
144		0103	76.8	漂砾岩					
145		0104	212.4	漂砾岩		1			
146		0105	21.3	漂砾岩					
147		0106	18.3	漂砾岩					
148		0107	36.4	漂砾岩		1			
149		0108	12.0	漂砾岩		1			
150		0109	21.5	漂砾岩		1			
151		0110	9.9	漂砾岩					
152		0111	10.7	漂砾岩					
153		0112	31.5	漂砾岩		1			
154		0113	17.6	漂砾岩		1			
155		0114	1.9	漂砾岩		1			
156		0115	17.4	漂砾岩					
157		0116	6.6	漂砾岩					
158		0117	10.9	漂砾岩		1			
159		0118	2.6	漂砾岩		1			
160		0119	0.8	漂砾岩		1			
161		0120	6.0	漂砾岩					
162		0121	5.8	漂砾岩		1			
163		0122	1.3	漂砾岩					
164		0123	27.7	漂砾岩					
165		0124	1.3	漂砾岩		1			
166		0125	4.3	漂砾岩					
167		0126	0.5	漂砾岩		1			
168		0127	2.9	漂砾岩		1			
169		0128	1.4	漂砾岩		1			
170		0129	4.9	漂砾岩		1			
171		0130	4.9	漂砾岩		1			
172		0131	1.9	漂砾岩					
173		0132	4.3	漂砾岩					
174		0133	5.1	漂砾岩					
175		0134	11.7	漂砾岩		1			
176		0135	2.0	漂砾岩		1			
177		0136	8.9	漂砾岩					
178		0137	0.8	漂砾岩					

(礫群②-3)

No.	グリッド	出露番号	高さ (m)	G	材	完熟	被熟	腐	可
179		0138	8.1		漂砾岩				
180		0139	6.4		漂砾岩				
181		0140	2.2		漂砾岩				
182		0141	27.0		漂砾岩				
183		0142	32.4		漂砾岩				
184		0143	143.0		漂砾岩				
185		0144	268.8		完熟				G類
186		0145	22.6		漂砾岩				
187		0146	10.7		漂砾岩				
188		0147	79.1		漂砾岩				
189		0148	8.9		漂砾岩				
190		0149A	447.1		漂砾岩				1点・積
191		0149B	245.6		漂砾岩				1点・積
192		0149C	117.1		漂砾岩				1点・積
193		0149D	178.1		漂砾岩				1点・積
194		0149E	52.3		漂砾岩				1点・積
195		0149F	42.5		漂砾岩				1点・積
196		0149G	38.6		漂砾岩				1点・積
197		0149H	23.2		漂砾岩				1点・積
198		0149I	9.0		漂砾岩				1点・積
199		0149J	5.8		漂砾岩				1点・積
200		0149K	3.9		漂砾岩				1点・積
201		0149L	4.5		漂砾岩				1点・積
202		0149M	2.9		漂砾岩				1点・積
203		0149N	2.8		漂砾岩				1点・積
204		0149O	6.8		漂砾岩				1点・積
205		0150A	11.5		漂砾岩				4点・積
206		0150B	11.1		漂砾岩				4点・積
207		0150C	9.0		漂砾岩				4点・積
208		0150D	7.0		漂砾岩				4点・積
209	42EE-54	0001A	65.0		完熟				1点・積
210		0001B	12.3		漂砾岩				1点・積
211		0001C	3.0		漂砾岩				1点・積
212		0001D	2.0		漂砾岩				1点・積
213		0002	84.3		完熟				
214		0003	6.5		漂砾岩				
215		0004	13.8		漂砾岩				
216		0005	1.0		漂砾岩				
217		0006	15.8		漂砾岩				
218		0007	3.2		漂砾岩				
219		0008	42.2		漂砾岩				
220		0009	31.6		漂砾岩				
221		0010	17.2		漂砾岩				
222		0011	1.2		漂砾岩				
223		0012	52.4		漂砾岩				
224		0013	8.0		漂砾岩				
225		0014	31.0		漂砾岩				
226		0015	4.0		漂砾岩				
227		0016	25.2		漂砾岩				
228		0017	52.8		漂砾岩				
229		0018	2.8		漂砾岩				
230		0019	26.0		漂砾岩				
231		0020	14.0		漂砾岩				
232		0021	3.2		完熟				
233		0022	63.0		漂砾岩				
234		0023	117.4		砾岩				
235		0024	1.6		漂砾岩				
236		0025	4.5		漂砾岩				
237		0026	6.8		漂砾岩				
238		0027	2.1		漂砾岩				
239		0028	117.4		砾岩				
240		0029	1.4		漂砾岩				
241		0030	8.0		漂砾岩				
242		0031A	47.8		漂砾岩				1点・積
243		0031B	37.5		漂砾岩				1点・積
244		0031C	9.8		漂砾岩				1点・積
245		0031D	5.5		漂砾岩				1点・積
246		0031E	4.7		漂砾岩				1点・積
247		0031F	8.1		漂砾岩				1点・積
248		0031G	8.5		漂砾岩				1点・積
249		0031H	6.5		漂砾岩				1点・積
250		0031I	3.6		漂砾岩				1点・積
251		0031J	4.5		漂砾岩				1点・積
252		0031K	4.1		漂砾岩				1点・積
253		0031L	2.5		漂砾岩				1点・積
254		0031M	3.0		漂砾岩				1点・積
255		0031N	2.4		漂砾岩				1点・積
256		0031O	3.0		漂砾岩				1点・積
257		0031P	3.7		漂砾岩				1点・積
258		0032A	258.1		漂砾岩				7点・積
259		0032B	31.4		漂砾岩				7点・積
260		0032C	36.1		漂砾岩				7点・積
261		0032D	13.7		漂砾岩				7点・積
262		0032E	10.4		漂砾岩				7点・積
263		0032F	13.6		漂砾岩				7点・積
264		0032G	2.4		漂砾岩				7点・積
265		0032H	41.5		漂砾岩				7点・積
266	42EE-62	0001	6.1		漂砾岩				
267		0002	27.1		漂砾岩				

(礫群②)

No.	グリッド	地図番号	重積 (g)	材質	形態	地質	標高	緯度	経度	地名
268		00003	1.6	メノウ		砂岩				
269		00005A	10.2	漂砾岩		2点-積				
270		00009B	2.0	漂砾岩		2点-積				
271	42EE-63	00002	14.1	漂砾岩						
272		0003A	3.1	宝石岩		2点-積+トロトロ	10石			
273		0003B	0.1	寶石岩		2点-積+トロトロ	10石			
274		00003C	0.1	寶石岩		3点-積+トロトロ	10石			
275		00004	4.5	漂砾岩						
276		00005	84.1	漂砾岩						
277		00006	1.1	漂砾岩						
278		00007	36.3	漂砾岩						
279		00008	5.2	漂砾岩						
280		00009	5.0	漂砾岩						
281		00010	3.5	漂砾岩						
282		00011	122.0	宝石岩						
283		00012	1.7	3.0 石						
284		00013	1.4	漂砾岩						
285		00014	0.2	砂岩						
286		00015	0.8	漂砾岩						
287		00016	3.3	漂砾岩						
288		00017	2.5	カルシウムマグマ						
289		00018	6.2	漂砾岩						
290		00019	1.5	漂砾岩						
291		00020	1.2	漂砾岩						
292		00021	453.3	鈍角砾岩						
293		00022	9.2	漂砾岩						
294		00023	14.0	宝石岩						
295		00024	7.0	漂砾岩						
296		00025	16.0	漂砾岩						
297		00026	2.0	漂砾岩						
298		00027A	6.1	片麻岩		2点-積				
299		00027B	1.2	片麻岩		2点-積				
300		00028	46.7	片麻岩						
301		00029	23.2	片麻岩						
302		00030	4.0	漂砾岩						
303		00031	3.0	漂砾岩						
304		00032	3.2	漂砾岩						
305		00033	0.8	漂砾岩						
306		00034	35.7	漂砾岩						
307		00035	3.9	漂砾岩						
308		00036	4.3	宝石岩						
309		00037	7.7	漂砾岩						
310		00038	16.2	漂砾岩						
311		00039	4.0	漂砾岩						
312		00040	0.5	漂砾岩						
313		00041	6.2	漂砾岩						
314		00042	18.1	漂砾岩						
315		00043	28.4	漂砾岩						
316		00044	25.2	漂砾岩						
317		00045	1.9	漂砾岩						
318		00046	2.2	漂砾岩						
319		00047	2.4	宝石岩						
320		00048	5.2	漂砾岩						
321		00049	12.2	漂砾岩						
322		00050	138.6	漂砾岩						
323		00051	1.5	漂砾岩						
324		00052	1.4	漂砾岩						
325		00054	10.8	漂砾岩						
326		00055	1.8	漂砾岩						
327		00056	3.9	漂砾岩						
328		00057	5.5	宝石岩						
329		00058	1.2	漂砾岩						
330		00059	8.2	漂砾岩						
331	42EE-64	0001A	13.7	宝石岩		2点-積				
332		0001B	3.9	漂砾岩		2点-積				
333		0002	5.0	漂砾岩						
334		0003	23.0	漂砾岩						
335		0004	0.5	漂砾岩						
336		0005	34.1	漂砾岩						
337		0006	0.8	メノウ		砂岩				
338		0007	23.7	宝石岩						
339		0008	62.2	宝石岩						
340	42EE-73	0002	1.4	漂砾岩						
341		0003	152.9	漂砾岩						
342		0004	76.5	漂砾岩						
343		0005	118.5	漂砾岩						
344		0006	4.4	宝石岩						
345		0007	3.0	漂砾岩						
346	42EE-75	0001	29.9	漂砾岩						
347		0002	78.1	漂砾岩						

3. 土坑・陥穴

原山遺跡では、調査段階で土坑 14 基・陥穴 14 基が検出され、いずれも時期は縄文時代となっている。しかし、整理作業の段階で各遺構について精査・再検討を加えたところ、風倒木痕の可能性の高いものや明らかに近世以降の落ち込みと判断できるものなどが含まれていることが判明し、これらを除外した。また、終了確認時に、平面形や規模を考慮せず深さのみから陥穴として扱ったものも含まれており、その性格について再検討をするものもあった。

ここでは、再検討の結果土坑ないしは陥穴であることが確実なもの 16 基について、一括して報告する。一応長軸と短軸の長さの比率が 2 : 1 以上の長楕円形を呈するものを陥穴、それ以下の円形に近いものを土坑として報告するが、その境界は明確ではない。

遺物はいくつかの遺構で縄文土器の細片が数点出土したのみで、出土しなかった遺構も多く、図示できたのは 2 遺構 3 点に過ぎない。出土位置も覆土中というだけで、確実に遺構に伴うものは 1 点もない。原山遺跡全体の様相から判断すると縄文時代前期黒浜式期かその前後の時期に掘り込まれた可能性が高いといえるが、確実ではない。

なお、遺構平面図は 1 : 60 の縮尺で図示したが、遺構が小規模であることから図中にグリッド名称を記載できなかったものが多い。正確な検出位置については、遺構配置図（第 4 図）を参照されたい。

SK-001（第 17 図、図版 5）

台地の北東側先端付近、41GG-25 グリッドに所在する。(3) 次調査で SK-004 として調査された土坑である。

平面形は径 1.3 m～1.4 m の略円形を呈し、坑底も径 0.4 m の円形である。断面は整った逆台形を呈しており、遺構確認面からの深さは 1.6 m を測る。

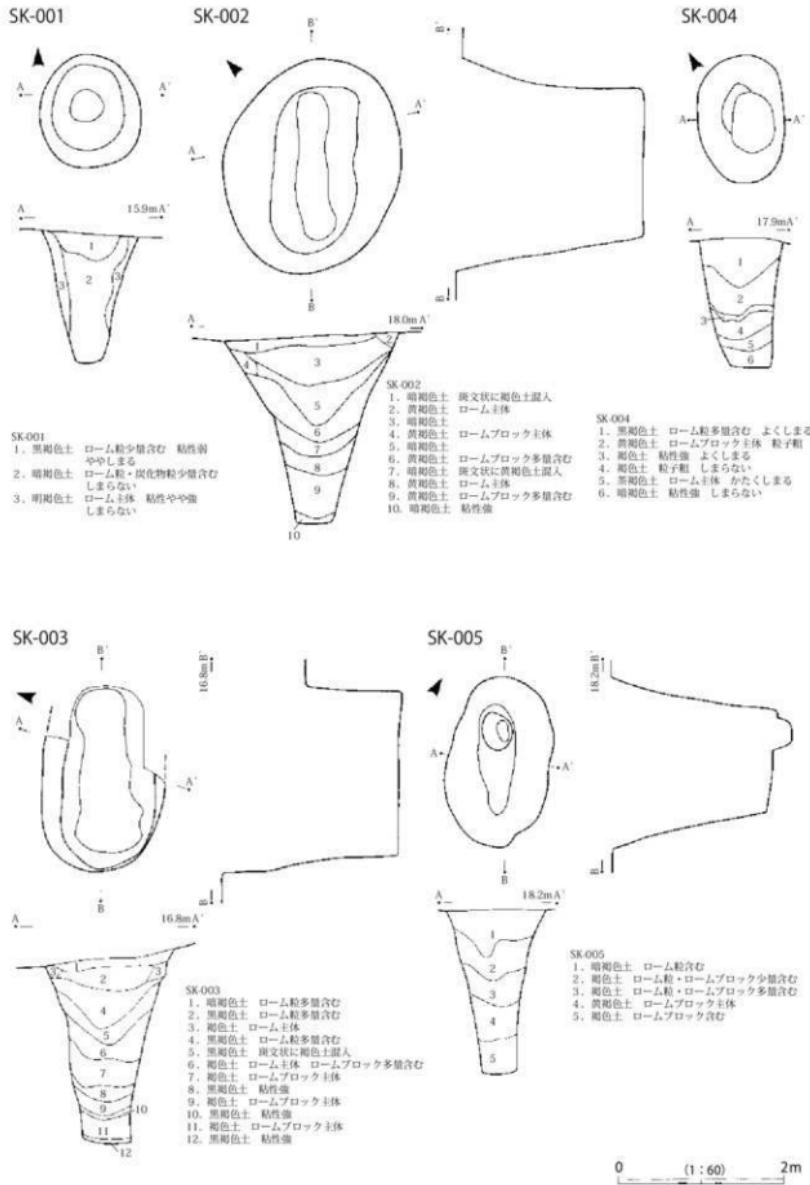
覆土はローム粒や炭化物粒を少量含むしまりのない層が主体となっており、一時期に埋没したようである。遺物は出土しなかった。

SK-002（第 17 図、図版 5）

台地北東側の緩斜面、42EE-45 グリッドに所在し、礫群②の東側に近接する。(2) 次調査で SK-013 として調査された陥穴である。

遺存する平面形は長軸 2.7 m、短軸 2.2 m の円形に近い楕円形であるが、これは開口時に短軸方向の遺構肩部が崩落したためと思われ、構築時はもう少し幅のせまい長楕円であった可能性が高い。主軸方向は N-44°-E である。坑底は長軸 1.8 m、短軸 0.4 m の長楕円形で平坦であり、遺構確認面からの深さは 2.3 m と深い。

覆土はローム粒を多く含む暗褐色土が主体で、下層ではロームブロックを主体とするうすい層がはさまることから、段階的に崩落と埋没が繰り返された可能性が高い。最下層の粘性の強い暗褐色土は、一定の開口期間があったことを物語るものであろう。遺物は出土しなかった。



第17図 SK-001～SK-005

SK-003（第17図、図版5）

台地北側に入り込む支谷に面する斜面の肩部、42CC-70・42BB-79 グリッドに所在する。礫群③の10mほど西側にある。(2)次調査でSK-011として調査された陥穴である。下層確認グリッドの調査中に1mほど掘削した段階で検出したため、遺構上端の東側2/5ほどを破壊してしまった。

遺構の平面形は長楕円形を呈し、遺存部で計測した規模は長軸が2.3m、短軸が1.5mである。主軸方向はN-69°-Eである。坑底は平坦であるが側面の掘り方には凹凸が多く、全体では長軸2.0m、短軸0.6mの不整長楕円形になる。遺構確認面からの深さは2.4mである。

覆土はSK-002とよく類似するが、下層でのロームブロックを主体とするうすい層の堆積はより顕著である。遺物は出土しなかった。

SK-004（第17図、図版5）

台地東側の地金堀の開析谷に面する斜面肩部、43FF-47 グリッドに位置する土坑である。付近にほかの遺構は分布しない。(3)次調査でSK-003として調査された。

平面形は長軸1.6m、短軸1.1mの略楕円形、坑底は北側にわずかな段を有するもののおおむね平坦で、長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形を呈する。主軸方向は、しいて長軸方向として測ればN-26°-Eとなる。

覆土は粒子が粗くぼろぼろでしまらない層とよくしまる層が交互に堆積している。突き固めながら埋め戻したのであろうか。遺物は出土しなかった。

SK-005（第17図、図版5）

台地北東側の緩斜面の肩部、43EE-84 グリッドに位置する。SI-005から北へ40m、礫群①から南へ40m隔たっており、付近にほかの遺構はない。(7)次調査でSK-003として調査された陥穴である。

平面形は遺構確認面で長軸2.1m、短軸1.3m、坑底で長軸1.4m、短軸0.5mのとともに不整楕円形を呈する。主軸方向は、N-31°-Wである。底面の北寄りに径30cm~40cm、深さ20cmほどの円形のピットがあるが、逆茂木痕であるか否かは不明である。遺構確認面からの深さは2.2mを測り、長軸・短軸方向ともV字形にやや外反しながら立ち上がっている。

覆土は全体に明るい色調で、下層ほどロームブロックを多く含んでいる。遺物は出土しなかった。

SK-006（第18図、図版5・8）

台地中央平坦面のやや北寄り、44CC-23 グリッドに所在する。SI-003とは東南東に約10m隔たっている。(6)次調査でSK-001として調査された土坑である。下層確認グリッドの調査中に40cmほど掘削した段階で検出したため、遺構南東側の上端の一部を破壊してしまった。

遺構の平面形は長軸1.6m、短軸推定1.3mの略円形を呈し、坑底は長軸60cm、短軸30cmと小さな楕円形となる。主軸方向は、しいて長軸方向とするならばN-40°-Eである。遺構確認面からの深さは2.2mを測る。

覆土は全体にローム粒やロームブロックの含有量が多く、特に中層以下はロームブロックを主体とする層が堆積している。

遺物は2点を図示した。どちらも黒浜式の深鉢形土器の胴部破片で、1は器壁全面に無節縄文しが横

回転施文される。2は破片左上が無節縄文Lの横回転、左下が単節縄文RLの縦回転、右側の大半は左上とは異なる原体の無節縄文Lの縦回転と、原体や回転方向の転換による羽状縄文が施される。どちらも胎土中には多量の植物纖維を含んでいる。どちらも覆土中から一括して取り上げた遺物で、詳細な出土位置はわからない。

SK-007（第18図、図版5）

SK-004とおなじく台地東側の地金堀の開析谷に面する斜面肩部に立地する。44FF-86・87グリッドにまたがって所在し、SK-004から南に約60mの地点にある。(3)次調査でSK-002として調査された陥穴である。

平面形は長軸2.5m、短軸0.8mの長楕円形を呈し、主軸方向はN-32°-Eである。遺構確認面からの深さは1.9mを測る。坑底は長軸2.2m、短軸0.3mの長楕円形で、底面は平坦である。

覆土の状況は複雑で、下層ほどしまらない屑が堆積している。一時に埋め戻された可能性が高いと思われる。遺物は出土しなかった。

SK-008（第18図、図版5）

台地中央平坦面のやや北寄り、45BB-22・23にまたがって所在する。SI-003やSK-006の南西、約50mのところにある。付近にほかの遺構はない。(8)次調査でSK-002として調査された陥穴である。下層確認グリッドにより南東側の上端の一部を破壊してしまったが、その範囲はわずかである。

平面形は長軸2.9m、短軸2.0mの楕円形を呈し、主軸方向はN-14°-Eである。底面は長軸2.3mで幅は広いところでも20cmに満たず、きわめて狭長である。遺構確認面からの深さは2.2mを測り、断面形は短軸方向では緩やかなV字形、長軸方向は深さ80cmほどのところですばり、坑底はややオーバーハングして袋状になっている。

覆土は中層より下位でロームブロックの含有量が多く、下層には粘性が弱くしまらない屑が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK-009（第18図、図版6）

台地のほぼ中央付近、45DD-25グリッドに所在する。SI-004の西、約10mの位置にある。(7)次調査でSK-002として調査された土坑である。下層確認グリッドを70cm~80cm掘削した段階で検出したため、南西側の遺構上端を大きく破壊してしまった。

遺構の平面形は長軸・短軸比の小さい楕円形で、規模は推定で長軸約1.5m、短軸約1.2m、主軸方向は、しいて長軸方向とするならばN-15°-Eである。遺構確認面からの深さは2.6mと深く、坑底は長軸60cm、短軸30cmという小さな楕円形で、底面は平坦である。

覆土は全体に暗い色調で、中層から下層にかけての黒褐色土はしまりが弱い。遺物は出土しなかった。

SK-010（第18図、図版6）

台地中央部やや東寄り、45EE-14グリッドに所在する。SI-005とSI-006にはさまれるような位置である。(2)次調査でSK-005として調査された土坑である。形状や深さからは陥穴の可能性も考えられるが、

最初に判断基準とした長軸と短軸の長さの比が2：1に満たないため、土坑として扱うこととした。

平面形は長軸2.0m、短軸1.6mの比較的整った楕円形を呈する。主軸方向はN-16°-Eである。坑底は長軸1.2m、短軸0.7mでこちらも整った楕円形を呈する。遺構確認面からの深さは2.3mと深く、断面形は長軸・短軸方向とも整った逆台形である。

覆土は全体に暗い色調で、上層には粘性の弱い層が、下層にはしまりの弱い層が堆積している。最下層の黒褐色土は、SK-002と同様ある程度の開口期間があったことを示しているのであろう。遺物は出土しなかった。

SK-011（第19図、図版6・8）

台地中央部やや東寄り、45EE-22・23・32グリッドにまたがって所在する。SK-010の南西約10mにあたる。(2)次と(7)次の調査範囲の境界にまたがって所在しており、(2)次調査ではSK-004として調査されたが、(7)次調査の上層確認調査では検出できなかったことから、(2)次調査の範囲の約1/2のみの調査となった。

推定される遺構の平面形は略楕円形で、規模は長軸約2.6m、短軸約1.8mとなる。この推定値では先の基準に基づけば土坑として扱うべきであるが、短軸方向の遺構肩部の崩落を考えられること、坑底の推定される形状が1.8m×0.6mの長楕円形になることから、陥穴として扱うこととした。推定される主軸方向は、N-29°-Eである。遺構確認面からの深さは2.3mで、断面形は比較的整った逆台形である。

覆土は中層から下位でロームを主体とする層と黒褐色土が交互に堆積しており、いずれもしまりは弱い。

遺物は覆土中から1点出土した。黒浜式の深鉢形土器の胴部破片で、器壁全体に単節縄文R Lが横回転施文され、胎土中には大量の植物纖維が含まれている。遺物は一括して取り上げたことから、詳細な出土位置はわからない。

SK-012（第19図、図版6）

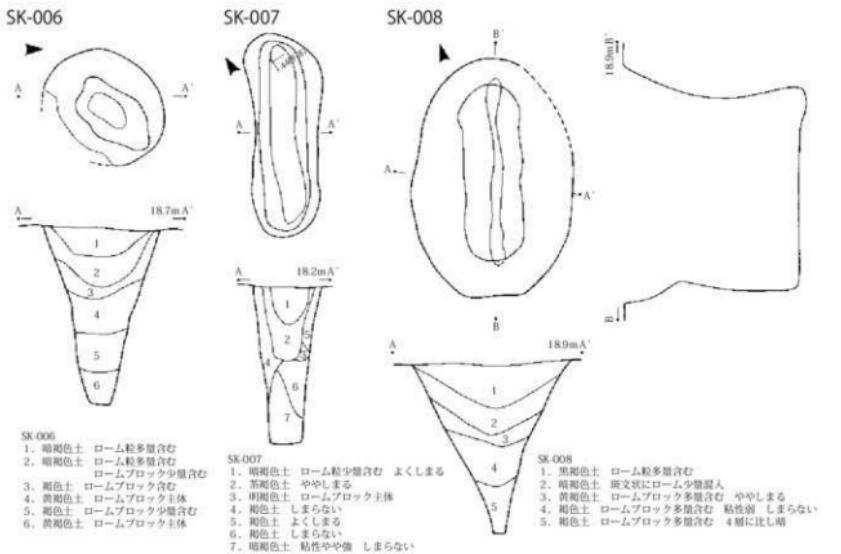
台地平坦面のほぼ中央、46DD-23・33グリッドにまたがって所在する。SI-004やSK-009の南南西約40mの位置にあたり、この付近から南は遺構がきわめて散漫になる。(7)次調査でSK-001として調査された陥穴である。下層確認グリッドを立川ローム層IX層下部まで掘り下げた段階で検出したため、遺構の北側の大半を破壊してしまった。

遺構の平面形は不整長楕円形と思われ、かろうじて破壊を免れた坑底から推定した長軸は約2.6m、短軸は遺存部で最大0.8mである。主軸方向はN-19°-Eである。遺構確認面からの深さは1.2mとそれほど深くないが、短軸方向の断面形は陥穴に特徴的な略漏斗形を呈しており、坑底は長軸1.6m、最大幅15cmと狭長である。

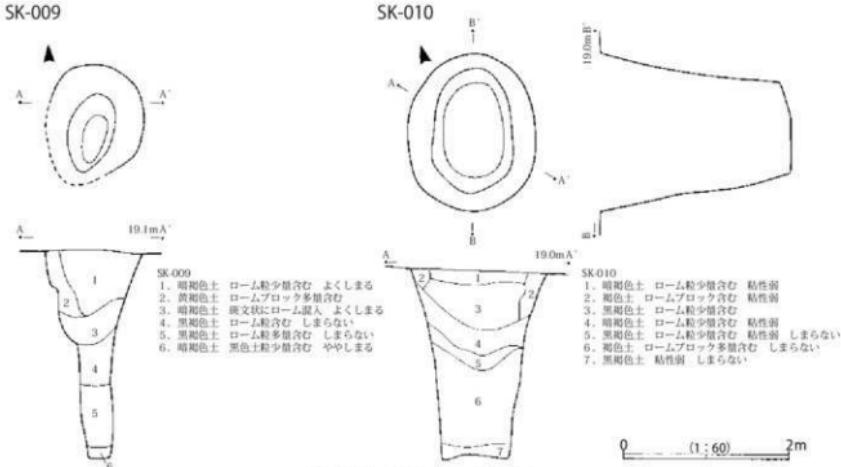
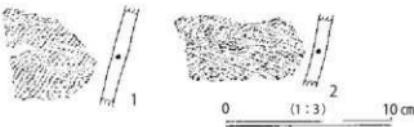
覆土は上層に斑文状にロームを混入する暗褐色土、中層から下層にロームを主体とする褐色土が堆積し、最下層は開口期間の存在を示す粘性の強い黒褐色土となっている。遺物は出土しなかった。

SK-013（第19図、図版6）

SK-004・SK-007と同じく、台地東側の地金堀の開析谷に面する斜面肩部に立地する。46FF-26・36グリッドにまたがって所在し、SK-007より50m以上南に隔たっている。付近にほかの遺構は分布しない。



SK-006 出土遺物



第18図 SK-006～SK-010

(3) 次調査で SK-001 として調査された土坑である。

遺構の平面形は最大径 1.4 m、最小径 1.2 m の略円形で、坑底も径 60cm～70cm の略円形、断面は逆台形を呈し、いずれもきわめて整った形状を成している。遺構確認面からの深さは 1.7 m を測る。

覆土は、ローム粒を多く含み比較的明るい色調の層がレンズ状に堆積している。自然埋没であろう。遺物は出土しなかった。

SK-014 (第 19 図、図版 6)

台地の南東寄り、地金堀の開析谷から台地の南側に入り込む浅い支谷に面した緩斜面の肩部に立地する。47EE-70・71 グリッドにまたがって所在し、周辺には遺構は分布せず、もっとも近い SK-012 でも約 80 m を隔てている。(2) 次調査で SK-006 として調査された土坑である。

遺構の平面形は全体ではおむね円形となるが、掘り方上端はきわめて不整な形状である。径はどこを計測するかによって大きく異なるが、最大 1.4 m、最小 1.1 m 程度である。坑底面は径 40cm～50cm の略円形を呈する。遺構確認面からの深さは 2.1 m と深く、断面形状は平面形の割に整った逆台形である。

覆土は全体にロームの含有量が多く、下層ではロームを主体とするしまらない層が堆積している。遺物は出土しなかった。

SK-015 (第 19 図、図版 6)

台地平坦面の南寄り、原山遺跡で最も標高の高いところに立地し、48BB-50・51・60・61 グリッドにまたがって所在する。原山遺跡の調査ではもっとも南に離れて単独で検出された遺構で、一番近くにある SK-016 からでも南に 100 m ほど隔たっている。(9) 次調査で SK-001 として調査された陥穴である。

ゴルフ場造成時の搅乱で北東側の上端の一部が破壊されているが、全体に比較的整った梢円形を呈する。規模は長軸 2.0 m、短軸 1.2 m で長さの比率は 2 : 1 に満たないが、全体の形状から東側の遺構肩部が崩落していると判断して、陥穴に含めた。坑底は長軸 1.4 m、短軸 0.4 m の長梢円形を呈し、こちらの長さの比率は 3 : 1 を超える。主軸方向は N - 5° - W である。遺構確認面からの深さは 2.0 m を測り、断面形は長軸・短軸方向とも整った逆台形である。

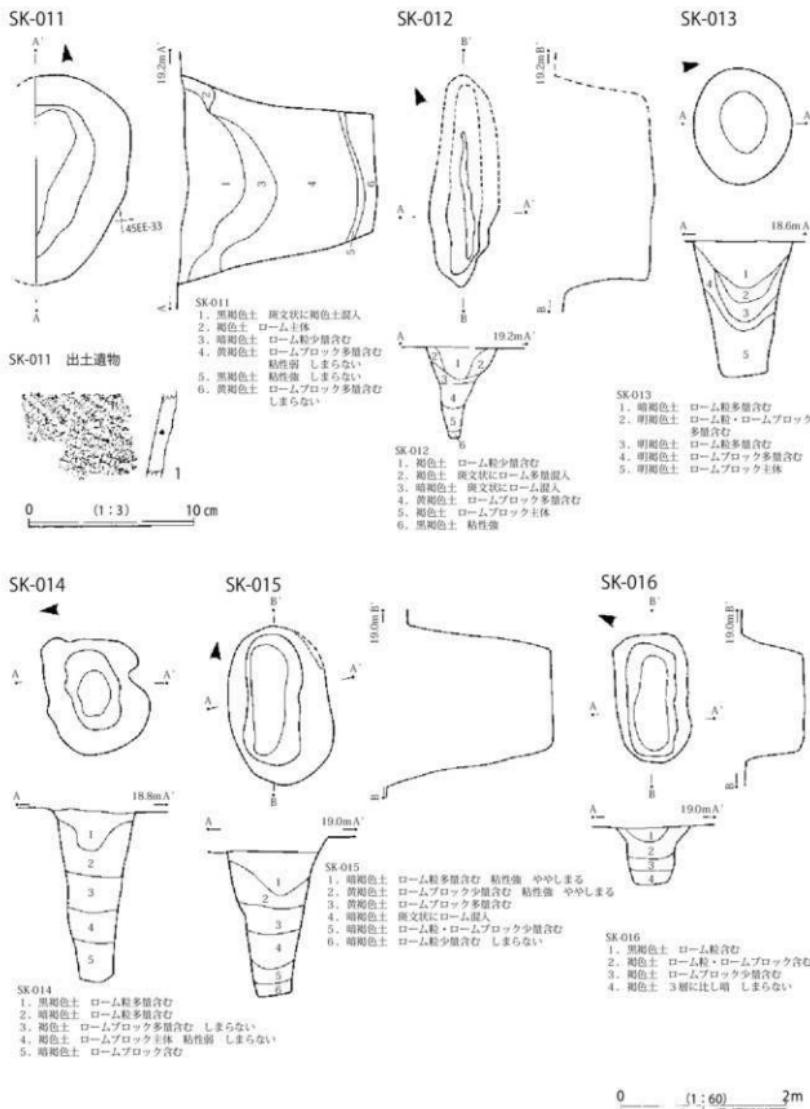
覆土は、上層にはロームブロックを主体とする黄褐色土が、下層にはローム粒を少量含む暗褐色土が堆積している。遺構中位まで自然埋没していたある段階で一気に埋め戻したのであろうか。遺物は出土しなかった。

SK-016 (第 19 図、図版 6)

台地平坦面のほぼ中央、46BB-21 グリッドに所在する。SK-008 の南、約 40 m の地点にあたる。(8) 次調査で SK-008 として調査された土坑である。

平面形は長軸 1.6 m、短軸 0.9 m の隅丸長方形、坑底は長軸 1.2 m、短軸 0.4 m の長梢円形を呈する。主軸方向は N - 68° - E である。深さは 70cm と浅く、底面は平坦である。

覆土は、ローム粒やロームブロックを含む比較的明るい色調の褐色土がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。



第19図 SK-011～SK-016

4. 遺構外出土遺物

各グリッドから出土したものや表面採集の遺物など、遺構に帰属しない遺物について報告する。

縄文土器（第 20～22 図、図版 9～11）

縄文土器は、計 68 点を図示した。器形の復元が可能であったのは 68 のみで、ほかはいずれも破片資料である。68 点のうち 46 点は黒浜式であった。

1 と 2 は同一個体で、1 が胴部上位、2 が胴部中位の破片と思われる。上面に貝殻背面圧痕を有する瘤状突起を縦に並べて貼り付け、そこを中心に 2 条の細沈線によって鋸歯状の文様を描く。2 では文様帶の下端を画する細沈線が 1 条横走し、鋸歯状の細沈線間には刺突が充填される。田戸上層式である。

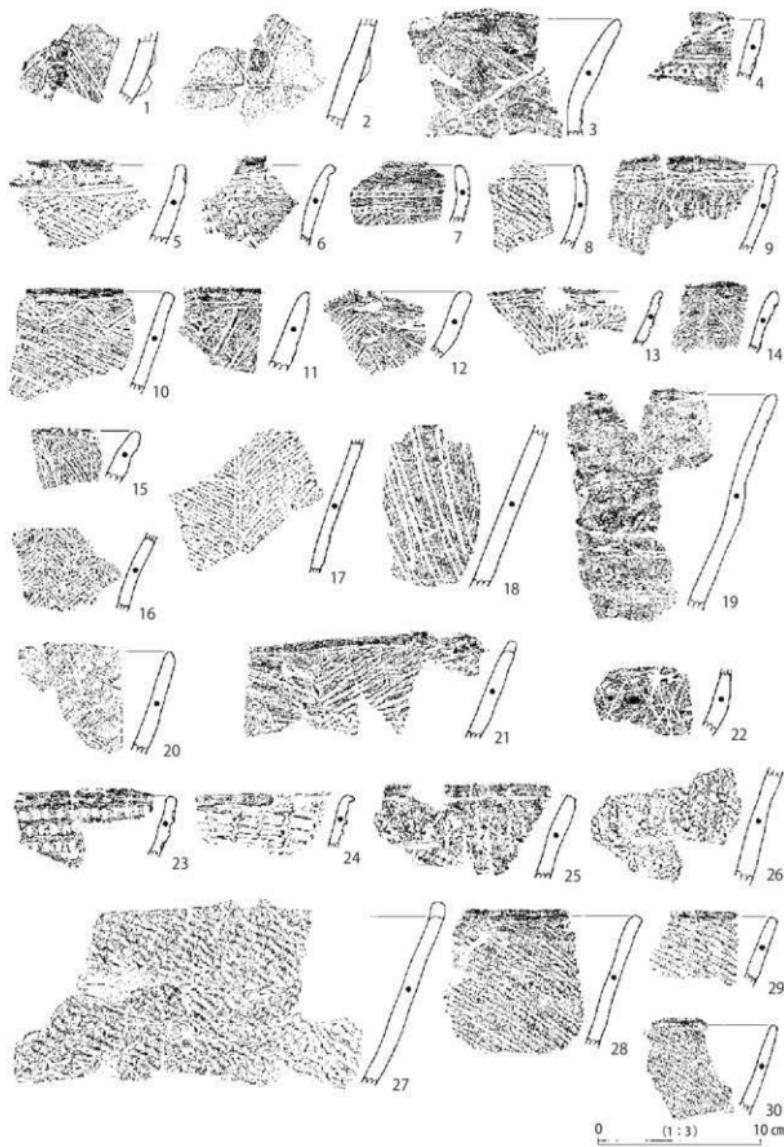
3～48 は縄文時代前期前半の黒浜式である。まず、地文の縄文以外に文様を持つものについて示す。3～18 は竹管による文様を持つものである。3 と 4 は、半截竹管平行沈線による文様のほか、竹管横断面による円形押捺列が廻っている。5～9 は口縁部外面に半截竹管の連続押捺や押引きによる連続爪形文が 1～2 条廻っている。5 と 6 では、胴部にも同様の連続爪形文による文様が観察できる。10～18 は半截竹管による平行沈線文で文様を描出するものである。10 は口縁部外面の口唇部直下に平行沈線が横走し、その下位に鋸歯状に平行沈線が廻る。地文は無節縄文 L に 0 段の細い R の縄 2 条を反対方向に附加した、附加条縄文の横回転施文である。11～18 は地文の縄文を持たず、半截竹管平行沈線のみによって文様を描く。11 と 12 は鋸歯状の平行沈線を重疊、13～17 は平行沈線 1 単位を懸垂させ、その間に斜位の平行沈線を充填することで葉脈状の文様としている。これらは、黒浜式のなかでは新しい段階の資料であろう。18 は胴下部の破片で、比較的径の太い半截竹管による平行沈線がやや右下がり斜位に地文のように施されている。

19～22 は、竹管によらず棒状の工具が使用されているものである。19 は口唇部から 5 cm ほどの範囲に格子目状に沈線が施される。地文はなく、施文は粗雑である。20 は 19 と同一個体と思われる。21 は口唇部に 2 単位以上の山形の小突起が付される平縁深鉢形土器の口縁部破片である。地文は擦りのゆるい単節縄文 L R と R L を組み合わせて羽状縄文としており、破片左下端に逆 V 字形の沈線が観察できる。V 字の内部の縄文は磨り消されている。22 は内湾の度が大きいことから口縁部から胴上部にかけての破片と思われ、先鋭な工具による沈線が格子目状を基本にランダムに施されている。

23 と 24 の文様は、多截した竹管によるものと思われる。23 は連続押捺による連続爪形文ともいえるが、先端の鈍った工具によるためか押捺の 1 単位は楕円形を呈している。この押捺列は 3 段廻り、その下位には縄文が施されているようだが、末端のみしか観察できず原体は不明である。24 の工具は竹管であることは確実であるが、径が大きいためか先端の平坦なヘラ状を呈していたと思われ、その腹面で押引いて施した文様は短沈線列とでも呼ぶべきものである。その押引き列が 4 段以上廻っている。

25 と 26 は同一個体で、単節縄文 R L を地文に口縁部外面にアナラ属貝殻腹線を鋸歯状に廻らせている。この貝殻腹線は全体の幅、肋の幅とともに大きく、アカガイのような大型の貝殻が使用されたようである。

27～48 には、地文の縄文のみが観察できる資料を示した。27～36 が口縁部破片、37～48 が胴部破片である。口縁部はいずれも平縁で、27 は口唇に 2 単位の山形の小突起が付される。地文の縄文には単節縄文のみのもの（27・39・44）もあるが少なく、複数の原体による羽状縄文や附加条縄文が施され



第20図 遺構外出土縄文土器 (1)

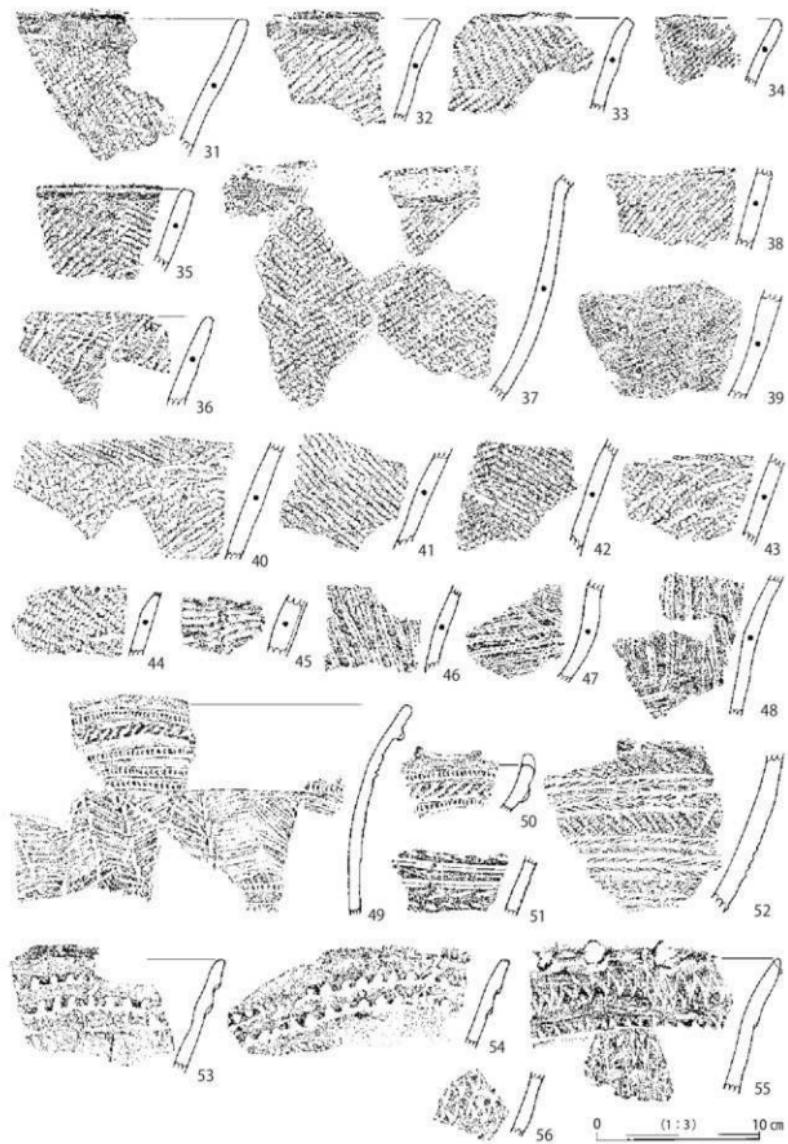
るものが多い。37は胴部中位から下部にかけての大型破片で、胴部中位のくびれ部（破片上端）には3条以上の撚糸文Lが横回転施文されており、文様帯の境界を画していたと思われる。46～48は同一個体と思われ、2条の撚糸文Rを1単位に軸棒に巻いたものを原体としている。附加条縄文の可能性もあるが、施文方向が縱位ないし横位を基本として斜位にならないこと、いずれの部位でも軸となる縄の痕跡が観察できないことから、撚糸文と判断した。

49～56には、縄文時代前期後半の資料を示した。49と50は同一個体である。ラッパ状に開く器形の深鉢形土器で、口唇には山形の小突起2単位が組み合わせて付される。口縁部外面に上面に斜位の刻みをもつ隆線が1条廻り、その上位に1条、下位に3条の半截竹管連続爪形文が廻る。その下位には幅5.5cm～6.0cmにわたって先鋭な工具による縦位の刺突列を基準に半截竹管による肋骨文が配され、さらに下方は横回転施文の単節縄文RLを地文に口縁部と同様の連続爪形文が2条廻っている。諸磯a式の資料である。51は半截竹管平行沈線が2単位横走し、その上下に横ハの字状の刺突列が廻っている。これも諸磯a式であろう。52は横回転施文の単節縄文RLを地文に、いわゆるソーメン状浮文と呼ばれる上面に刻みをもつ細隆線が4条1単位で3単位以上横走している。細隆線上の刻みは1条ごとに方向を転換して施している。諸磯b式である。

53と54は同一個体である。口縁部外面を2段にわたって折返し状に輪積み痕を残し、剥落を防止するかのように貝殻腹縁を用いて刻み状に押さえている。55と56は同一個体である。口唇部に上方から3cm～5cm間隔で指頭押捺を加え、平線に刻み目文状の変化を与えていている。口縁部から4.5cmほど下方に折返し状に輪積み痕を残し、貝殻腹縁を鋸歯状にすらしながら押さえている。鋸歯状貝殻腹縁文はこの上下にも観察され、合計4段以上廻っていることがわかる。いずれも浮島式の資料である。

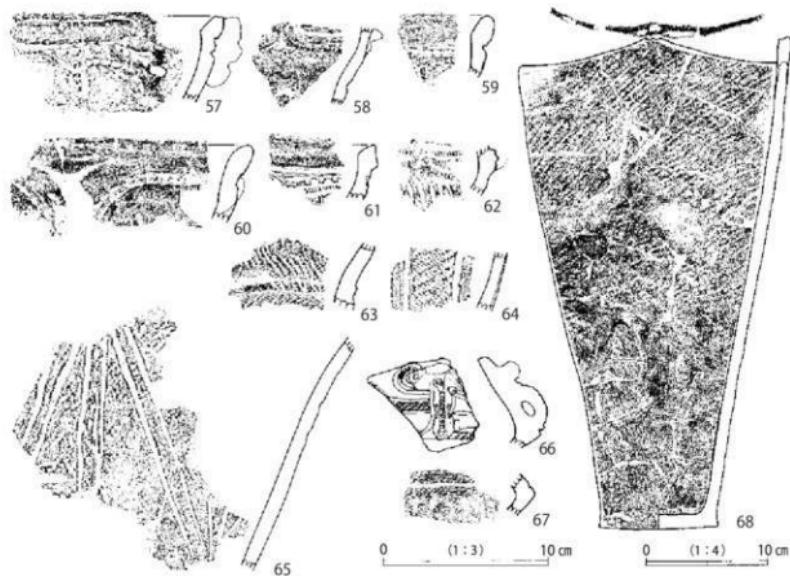
57～64は縄文時代中期の資料である。57と58は胎土の特徴や色調がよく似ていることから、同一個体かもしれない。突起や隆線を組み合わせて窓枠状の区画文を構成し、区画内に連続刺突による結節沈線を配する。59も同様の文様構成となろう。隆線に付随する結節沈線が1条であることから、阿玉台Ib式であろう。60も文様構成は類似するが、区画内の結節沈線が幅広で先端が角張った工具の押引きによる角押し文になっていることから、阿玉台III式であろう。61と62は同一個体である。口縁部は角張った断面形態を呈し、口縁部文様帶は交互刺突による連続コの字状文、上面に沈線や刻みを伴う隆線、縦位集合太沈線などで構成される。62から判断して、おそらくキャリバー形の器形となろう。中轄式の資料である。63は胴部中位のくびれ部付近の破片である。括れ部には断面カマボコ形の隆線が廻り、隆線より上位が単節縄文RLの横回転施文、下位が同一原体の縦回転施文である。横回転施文は一部隆線の上面にかぶっている。これも中轄式である。64は単節縄文RLを地文に整った磨消懸垂文が垂下する。施文がていねいで縄文施文部の幅が磨消部の幅より広いことから、加曾利EII式と思われる。

65～68には縄文時代後期の資料を示した。65はわずかに外反しながら立ち上がる深鉢形土器の胴部破片である。撚りのゆるい単節縄文LRを横回転施文し、縦位や斜位の平行沈線によって文様を構成している。縦位に垂下する平行沈線間に径4mmほどの円形刺突文が1cm程度の等間隔で充填される。堀之内I式である。68は唯一ほぼ完形まで復元できた深鉢形土器である。基本的には平線で、ゆるやかで大きな山形の突起が1単位付される。突起の頂部は円孔状に浅くくぼんでいる。ほぼまっすぐに開きながら立ち上がる器形で、口径22.2cm、底径9.8cm、器高は38.2cmを測る。文様は、胴部の上半分に撚りのゆるい単節縄文LRが横回転施文されるのみである。堀之内I式である。66と67は同一個体で、算盤玉形



第21図 遺構外出土縄文土器(2)

の器形を呈する注口土器と思われる。文様は胴部中位の屈曲部から上方に集約され、刻みや円孔を伴う橋状把手と横位の帶縄文により構成されている。帶縄文に使用される縄文は、条・節とともに細かい単節縄文 L Rである。加曾利B式期の資料であろう。



第22図 遺構外出土縄文土器(3)

石器・石製品（第23～25図、図版11～13）

石器と石製品については、剥片石器27点、礫石器10点、石製垂飾品1点の計38点を図示した。剥片石器のうち1点は確実に旧石器時代の所産であり、ほかにも旧石器時代にさかのぼる可能性のある資料が1点含まれているが、これらは上層調査中に出土したために上層の遺物と一緒にして扱われ、下層の報告からもれ落ちたものである。

1は旧石器時代のナイフ形石器である。灰褐色に風化した安山岩による不定型な剥片を縦位に用い、右側面の全体と左側面の基部側に、急角度の調整加工がなされている。上層遺構検出中に出土した資料で、細かな帰属標準は不明であるが、石器の形態及び使用石材を勘案すると、立川ローム層IV層下部のナイフ形石器と想定される。なお、本石器出土地点周辺に旧石器時代のブロックは検出されていないが、25mほど離れた地点に立川ローム層IV層下部のブロックが数か所分布しており、類似する形態のナイフ形石器も含まれることから、関連すると考えられる。2も旧石器時代に帰属する可能性がある削器である。石材は、黄灰色に風化した粘板岩質のホルンフェルスで、大型不整形の縦長剥片を素材として、左側面全体に粗い調整加工がなされている。3は土器出現期（縄文時代草創期）に帰属する大型細身の槍先形石器と考えた資料である。石材は、黒灰色の地に灰白色の縞が入るホルンフェルス（または黒色頁岩）で、表面はやや急角度の剥離面に覆われているが、裏面は平坦な調整加工の剥離面と素材時の主要剥離面で構成される。なお、当該期の槍先形石器としては素材時の剥離面が広く残され、縦位方向にゆるやかに湾曲することから、先端部を鋭利にした削器の可能性も捨てきれない。下半部は欠損する。4は土器出現期と想定される中型幅広の槍先形石器である。石材は、黄灰色を呈する粘板岩質のホルンフェルスで、風化によって層状に剥離しやすくなっているが、表面中央が大きく剥落する。最大幅が基部側に偏り、基部が丸く仕上げられた「横倉型」とも呼称される形態である。表裏両面ともに平坦な調整加工によって覆われており、横断面形状は薄い凸レンズ状である。先端部は欠損する。

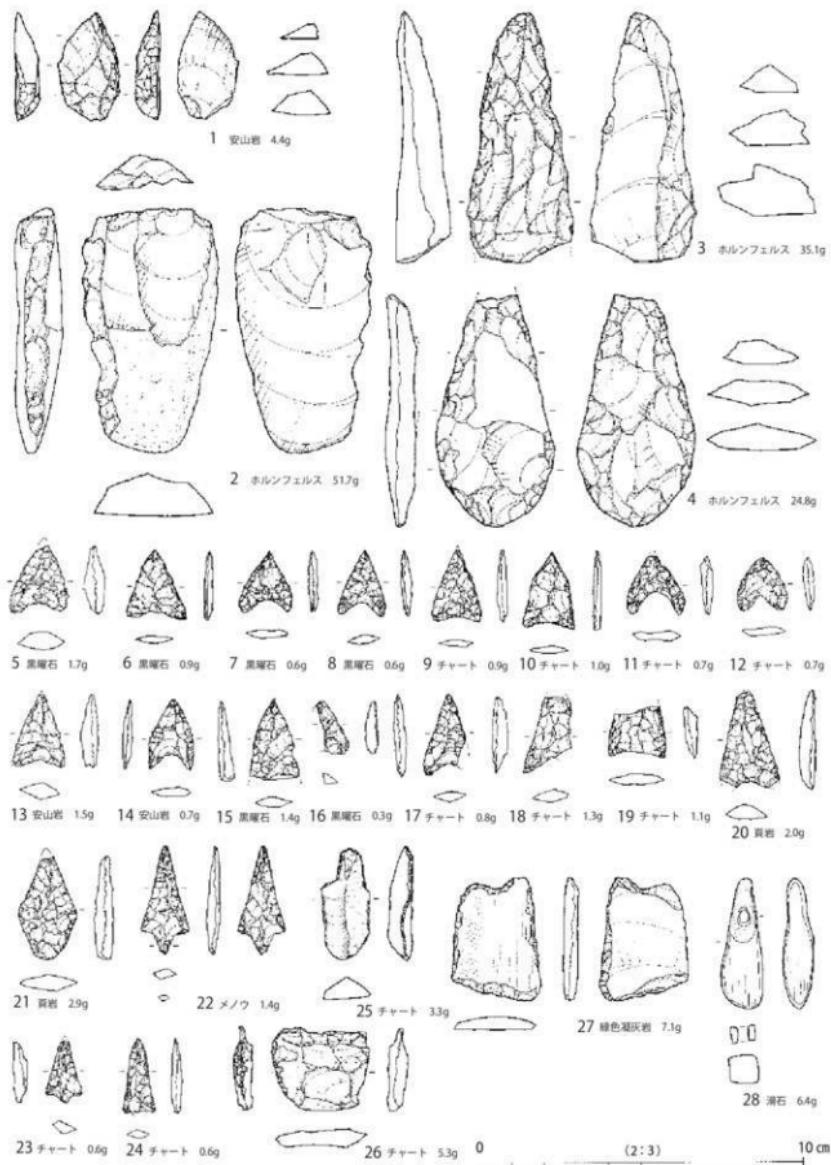
5～24は石鎚である。平面形態は、基部に抉りの入る凹基式（5～14、16～20）、尖基式（21）、有茎式（22～24）の3者があり、また凹基式の抉りの形態も多様である。いずれも両面がていねいに加工されており、12と23を除くと素材時の剥離面は残されていない。なお、15は基部が欠損しており、形態は不明である。薄手で精緻な調整加工に覆われていることから石鎚と判断したが、旧石器時代に帰属する槍先形石器の可能性も残る。石材は、黒曜石6点、安山岩2点、チャート9点、頁岩2点、メノウ1点である。黒曜石製は5～8、15・16である。やや青みがかった黒色不透明で、乳白色の夾雜物がまばらに含まれるもの（5）、無色透明の地に黒灰色のモヤが入るもの（6・7・16）、無色透明の地に黒色の縞が平行して入るもの（8）があり、神津島産や信州産など複数の原産地に由来すると想定される。また15は、黒色不透明の地に褐色不定形でやや大型の夾雜物が散在していることから、栃木県高原山産の可能性がある。チャート製は9～12、17～19、23・24である。灰色ないしは淡灰褐色半透明の地に暗青灰色の縞が網目状に入る（9・10・19・24）、灰白色不透明の地に暗青灰色の縞が網目状に入る（12）、黒色不透明で部分的に灰白色の不純物が入るもの（11）、淡灰緑色不透明のもの（17・23）、暗灰緑色不透明のもの（18）がある。安山岩製は13・14である。前者は灰白色に風化した「トロトロ石」、後者は褐色に風化した通常の安山岩である。頁岩製は20・21である。前者は黄褐色を呈し、硬質緻密で油脂状光沢をもつ。後者は灰白色を呈するが、やはり硬質緻密であり、両者とも東北南部に由来する可能性がある。22は乳白色不透明のメノウ製である。

25は不整形の縦長剥片を素材とする加工痕のある剥片である。石材は、灰緑色の地に紫色のモヤが入る均質なチャートである。裏面のバルブが発達しないことから、両極打撃によって得られた剥片を利用した可能性がある。上半部の左右両側面に大きさのそろった微細な剥離痕が連続する。また、右側縁中央には刃こぼれのような剥離痕がみられる。26は楔形石器とした資料で、石材は灰紫色不透明の地に黒色の細い縞が入るチャートである。実測図表面の下端及び左側面上部に円盤面がみられること、上端全体と下端の一部が潰れていることから、直径3cm～4cm程度の小円盤に両極打撃が加えられて得られたものと考えられる。表裏両面ともネガティブな剥離面に覆われており、礫の芯（核）の部分にあたるが、比較的薄手であり、石鎚の素材として生産された可能性がある。27は明灰緑色を呈する緑色凝灰岩による削器である。表面のほぼ全周と裏面の左側縁に細かな調整加工がみられる。なお、表面全体が細かく研磨されており、磨製石斧の再加工に際して生じた剥片を用いたと考えられる。28は垂飾品である。石材は灰緑色の地に黒色の斑が入る滑石で、各側面ともに研磨されている。両側穿孔である。なお、28は礫群②から出土したものであるが、礫群から出土した遺物のなかにほかには図示するべきものがなかったことから、ここに示した。

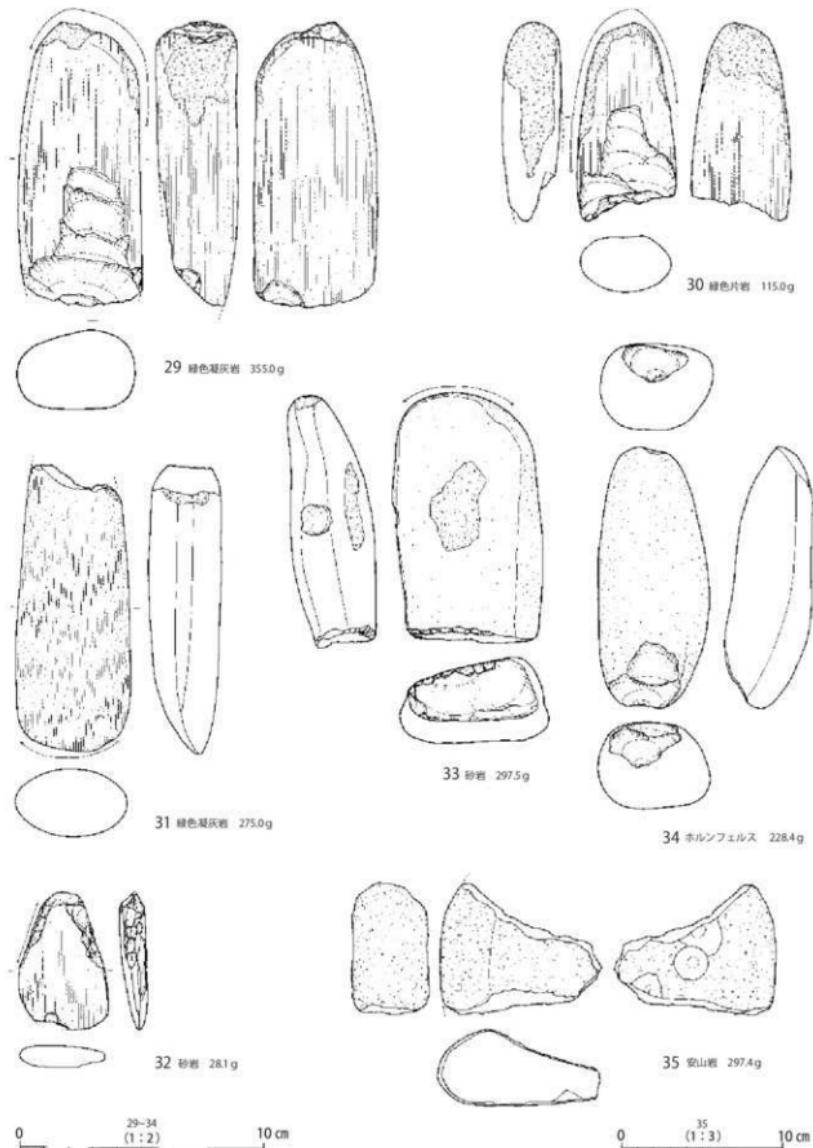
29～32は磨製石斧である。29は明灰緑色を呈する緑色凝灰岩によるやや大型の乳棒状石斧で、頭部周辺に敲打痕を残すほかは全面が研磨されている。表裏両面は平坦であるが、側面との境界に明瞭な稜線はみられない。頭部から刃部にかけて、幅に変化のない形態である。刃部周辺は節理面に沿って割れている。30は暗灰緑色を呈する緑色片岩による中型の乳棒状石斧で、頭部周辺に敲打痕を残すほかは全面に研磨がなされていたと考えられる。表裏両面はゆるやかに湾曲し、両側面中央にわずかながら稜がみられる。本来の刃部は欠失するが、下半部表面側には大小の不ぞろいな剥離面がみられる。再加工を意図したものであろうか。31は明灰緑色を呈する緑色凝灰岩によるやや大型の乳棒状石斧で、頭部を欠損する。表裏両面はゆるやかに湾曲し、両側面中央部にわずかな稜がみられる。平面形態は、頭部から刃部に向かって広がっている。使用石材は29と、形態は30と共に通する。刃部は片面側に湾曲する丸鑿状を呈しており、左右同程度に刃こぼれが残されている。32は淡黒灰色を呈する硬質な砂岩による小型品で、表裏両面が平坦に仕上げられた薄手の磨製石斧である。表裏面の大半は研磨されているが、頭部周辺には剥離面と敲打痕が残る。刃部はうすい両刃で、左右不均等に損傷する。

33は、敲石と凹石の機能をあわせ持つ石器と考えられる。石材は淡黄褐色の砂岩である。実測図上端には潰れた痕跡があり、表面中央は敲打によりわずかにくぼんでいる。下端部は折れているが、折れ面に敲打に伴うと考えられる細かな剥離痕がみられる。34は敲石である。石材は灰色で砂岩質のホルンフェルスである。橢円形の円盤の上下両端に、敲打に伴うと考えられる剥離面がみられる。

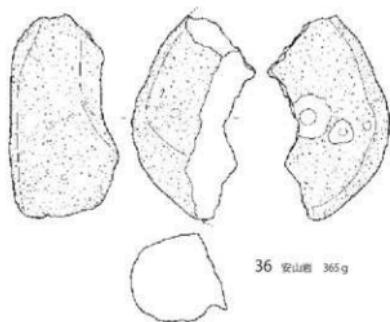
35は黄灰色を呈する多孔質の安山岩による石皿の小片である。裏面には直径2cmほどの孔がある。36と37は赤みがかった灰褐色を呈する多孔質の安山岩による石皿片で、両者は同一個体の可能性がある。36は表面のくぼみが浅く、37は縁が明瞭で深いことから、同一個体であれば前者が石皿の手前側、後者が奥の部分と考えられる。両者ともに、裏面に直径2cm程度の孔がみられる。38は淡黒灰色の地に白色の細かな斑が多い量に入る多孔質の安山岩による石皿片である。縁は比較的明瞭であるが、表面は浅いことから、石皿の手前の部分と考えられる。



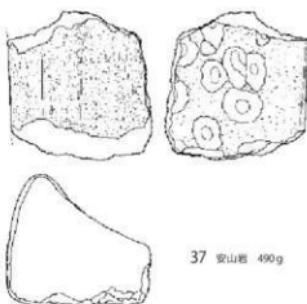
第23図 遺構外出土石器(1)



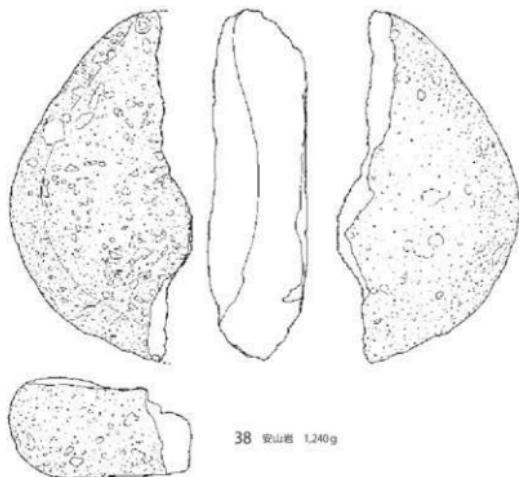
第24図 遺構外出土石器(2)



36 安山区 365g



37 安山区 490g



38 安山区 1,240g

0 (1 : 3) 10 cm

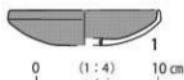
第25図 遺構外出土石器(3)

第2節 古墳時代以降

古墳時代以降については、わずかに古墳時代後期の土師器1点と中・近世の銭貨9枚が出土したのみである。これらは、いずれも遺構には伴わずに出土した。

古墳時代土師器（第26図、図版13）

古墳時代後期の土師器杯の小破片が1点出土した。推定口径12.1cm、推定器高は2.8cmである。調整は口縁部がヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデで、内外面とも赤彩が施されている。



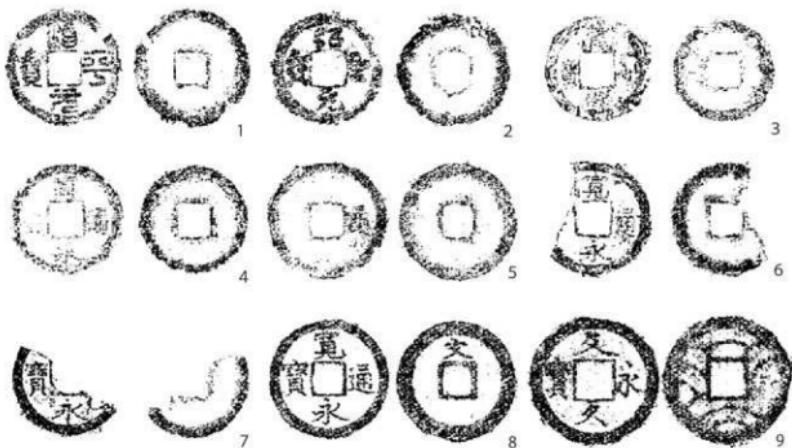
第26図 遺構外出土土師器

銭貨（第27図、図版13）

中世から近世にかけての銭貨が計9枚出土した。中世の北宋錢が2枚、残る7枚は近世銭貨である。

1は北宋錢の治平元寶である。初鑄は1064年で字体は真書、径24.7mm、重量2.5gを測る。2は北宋錢の紹聖元寶である。初鑄は1094年で字体は篆書、径23.7mm、重量2.1gを測る。

3～8は寛永通寶で、うち3～7の5点が古寛永である。古寛永は摩滅の著しいものが多く、4は寶がほとんど読み取れず、5に至ってはかろうじて永のごく一部と通が読み取れるに過ぎない。計測値は3が21.3mm・1.4g、4が22.6mm・1.8g、5が24.5mm・2.3gである。6は径が23.6mmで、ゆがみのためうまく接合できない破片を併せた重量は2.2gを測る。7は遺存部の最大径が23.4mm、遺存重量は1.1gである。8は新寛永で、裏面の上部に文と刻まれた「文銭」である。径25.1mm、重量3.7gを測る。9は文久永寶で、文が草書体となる「草文」と呼ばれる型式である。径26.9mm、重量3.3gを測る。



第27図 遺構外出土銭貨

第3章 まとめ

今回の調査成果の概要を記載し、まとめとしたい。

これまで報告したとおり、11次にわたる原山遺跡の発掘調査で検出された上層遺構は竪穴住居跡6軒、礫群3か所、土坑8基、陥穴8基である。戦前の陸軍飛行場や戦後のゴルフ場を建設する際に行われた削平や改変を考慮に入れても、10万m²ちかくに及ぶ調査対象面積からみれば遺構密度は希薄であるといわざるを得ない。さらには、竪穴住居跡は43CC～44CCグリッドにかけてと45DD～45EEグリッドにかけて3軒ずつまとめて所在し、また礫群もその北側の42CCグリッドで1か所と42EEグリッドで2か所が検出されており、この範囲を除いては土坑や陥穴がわずかに散在しているに過ぎない。特に台地の基部である遺跡の西側から南側にかけては、まったくといっていいほど遺構が存在しない。

遺構の時期についてみると、竪穴住居跡はいずれも縄文時代前期の黒浜式期の所産である。礫群のうち1か所からは縄文時代中期阿玉台式期の土器が少量出土しているが、その量はごくわずかであり遺構外出土遺物の特徴なども鑑みると、今回検出された礫群も黒浜式期に形成された可能性が高いと思われる。土坑や陥穴からは遺物はほとんど出土しないが、出土したものはすべて黒浜式であった。

遺構外出土土器をみると、図示したもの68点の内訳は早期沈線文系土器2点、前期前半の黒浜式46点、前期後半の諸磯式・浮島式8点、中期前半の阿玉台式4点、中期中葉の中峠式3点、中期後半の加曾利E式1点、後期前半の堀之内式2点、後期中葉の加曾利B式2点となり、黒浜式が全体の70%近くを占める。黒浜式土器は掲載にあたって取捨選択をしているのに対し、ほかの型式はほぼ全点を図示したことから、黒浜式が占める実際の割合はさらに高くなる。

このようにみてくると、縄文時代以降原山遺跡が利用されたのは、縄文時代前期黒浜式期のごく限られた時期であったことがわかる。弥生時代以降にいたっては遺物すらほとんど残されておらず、わずかに古墳時代後期の土師器杯1点と、中世銭貨2点、近世銭貨7点を図示できただに過ぎない。そして、何もない平坦な台地であったからこそ、近世において牧として利用するには絶好の土地であっただろうし、近代以降、陸軍が飛行場を造成するにも最適な地形であったのだろう。

最後に、原山遺跡の黒浜式期の集落について若干ふれておく。当該期が遺跡の主体をなすとはいうものの、竪穴住居跡6軒と礫群3か所という内容であり、集落としてはごく小規模なものである。これに対して、地金堀をはさんで北東側の利根川本流に直接面する台地上では、常磐自動車道の建設に伴って調査された花前I遺跡・花前II遺跡、柏北部東地区土地区画整理事業に伴って調査された駒形遺跡・富士見遺跡・大松遺跡・原畠遺跡などで黒浜式を含む縄文時代前期前半の大規模集落が検出されており、竪穴住居の総軒数は150軒を越える。これらのなかには遺構内貝層をもつものが多数含まれており、この地域の特徴となっているが、原山遺跡では検出例はない。縄文時代前期前半期の縄文海進最盛期に、利根川本流と地金堀にはさまれて水利に恵まれた広大な台地上には拠点的な集落が築かれ、これに対して小河川の上流部には原山遺跡のような小規模な谷奥集落がおかれて、狩猟活動の拠点などとして利用されたのであろう。遺構や遺物の内容のわりに石器が多く出土している(21点)ことも、それを裏付けているのかもしれない。

写 真 図 版

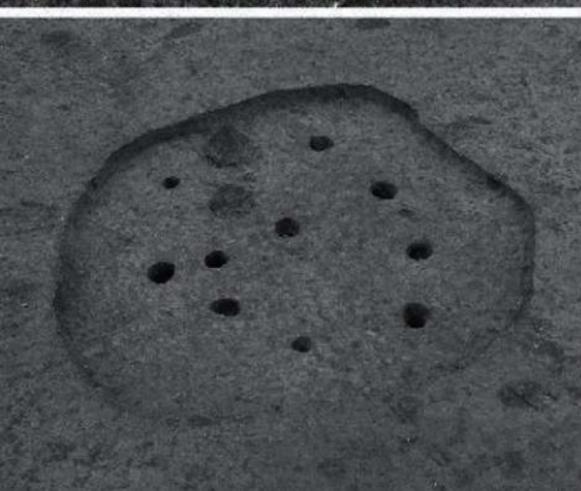




SI-001



SI-002



SI-003



SI-004



SI-005



SI-006



碟群①



碟群②



碟群③



SK-001



SK-002



SK-003



SK-004



SK-005



SK-006

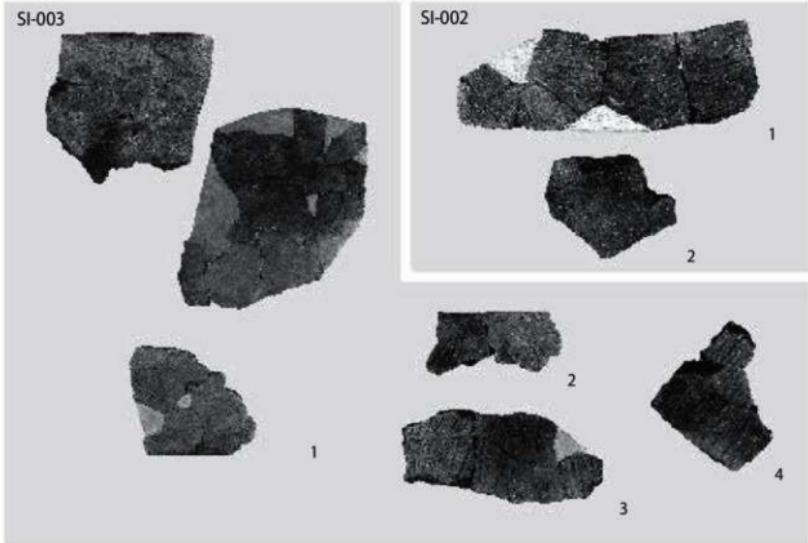


SK-007



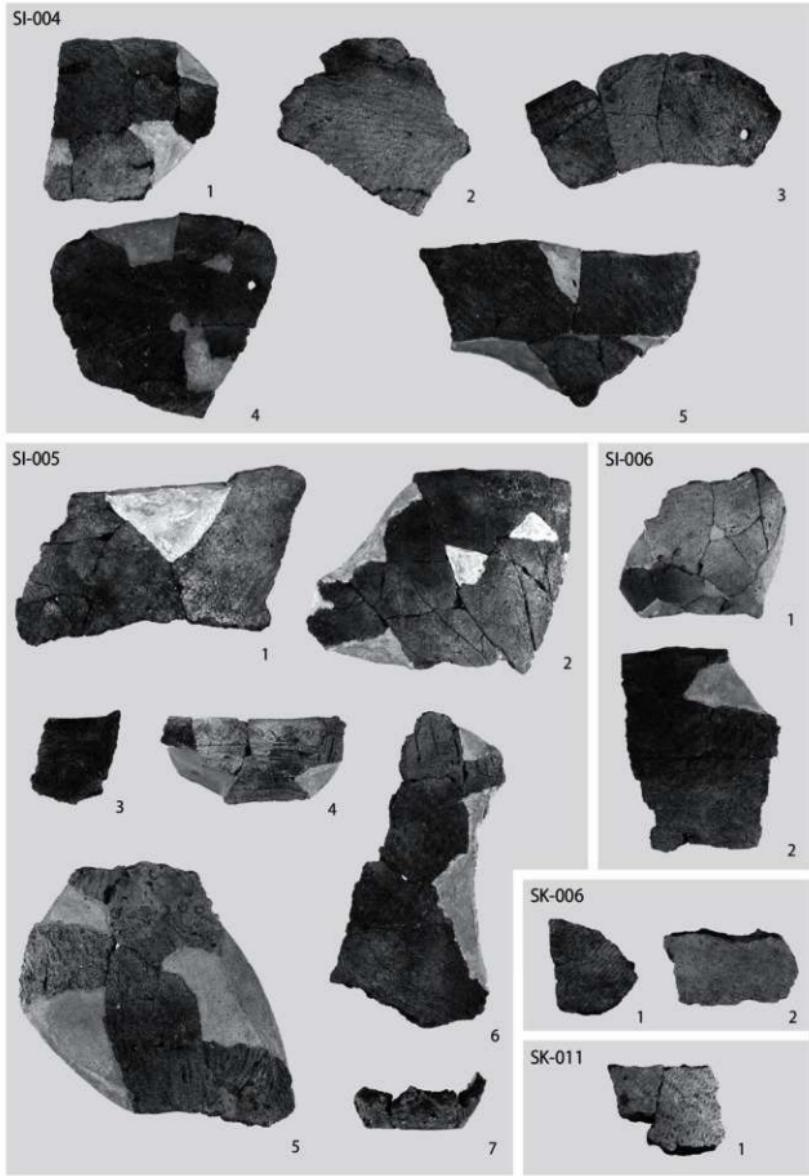
SK-008



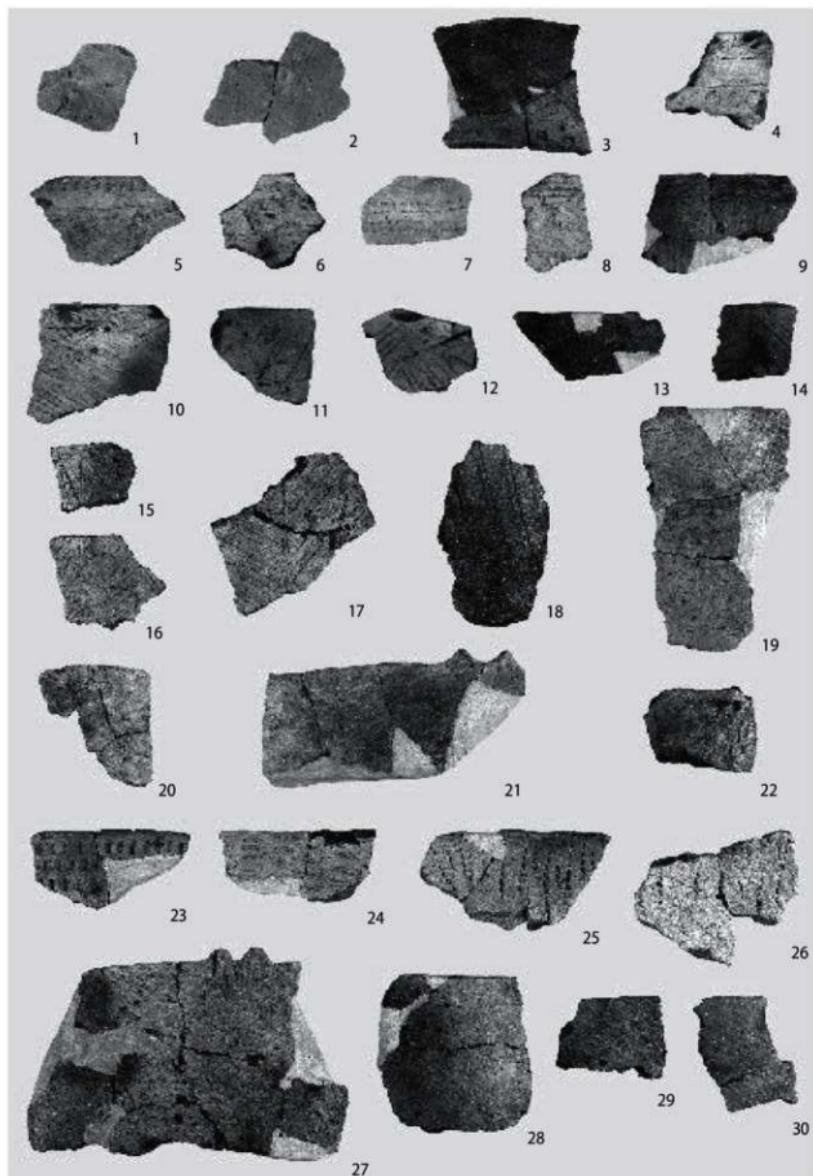


遺構内出土遺物（1）

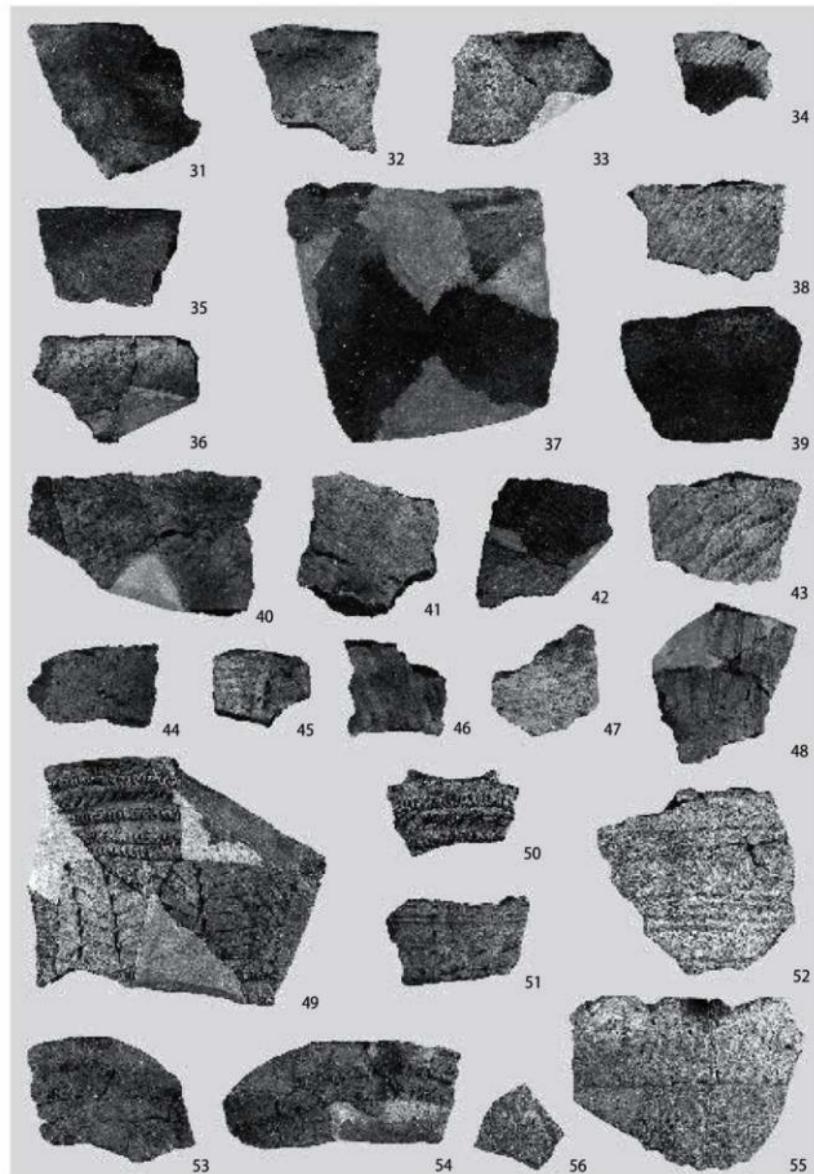
図版 8



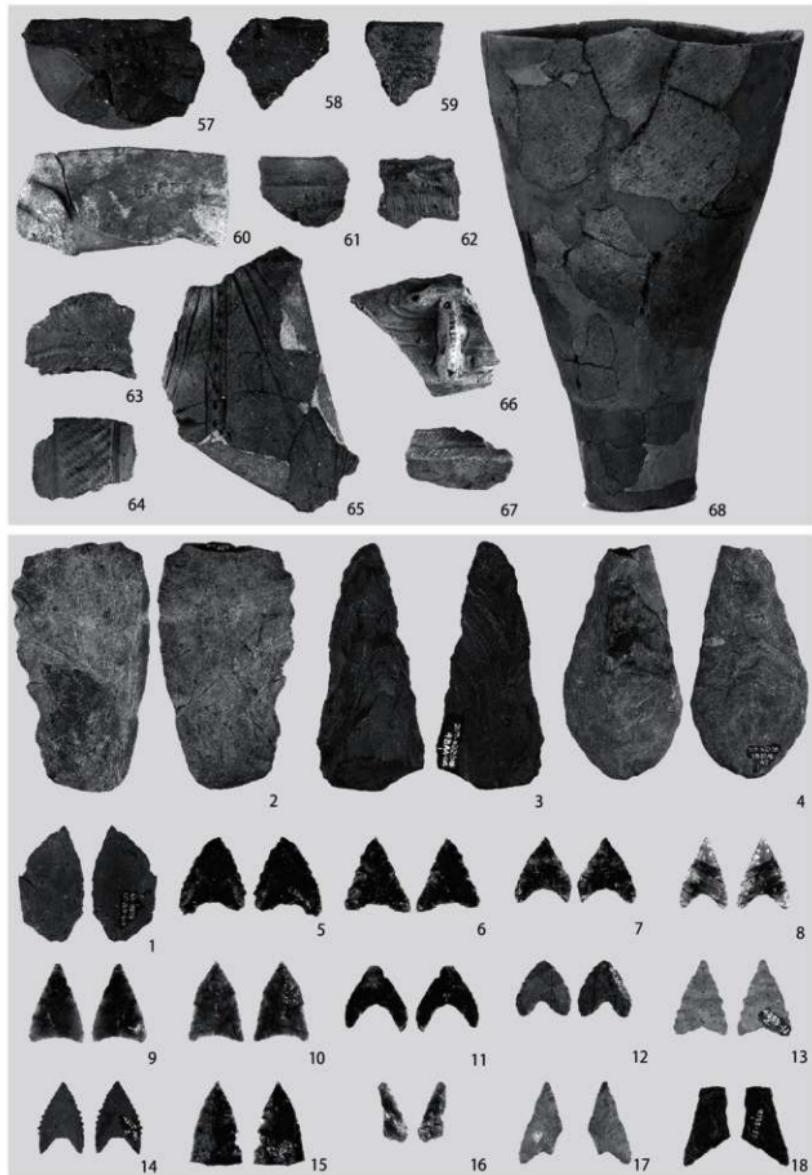
遺構内出土遺物（2）



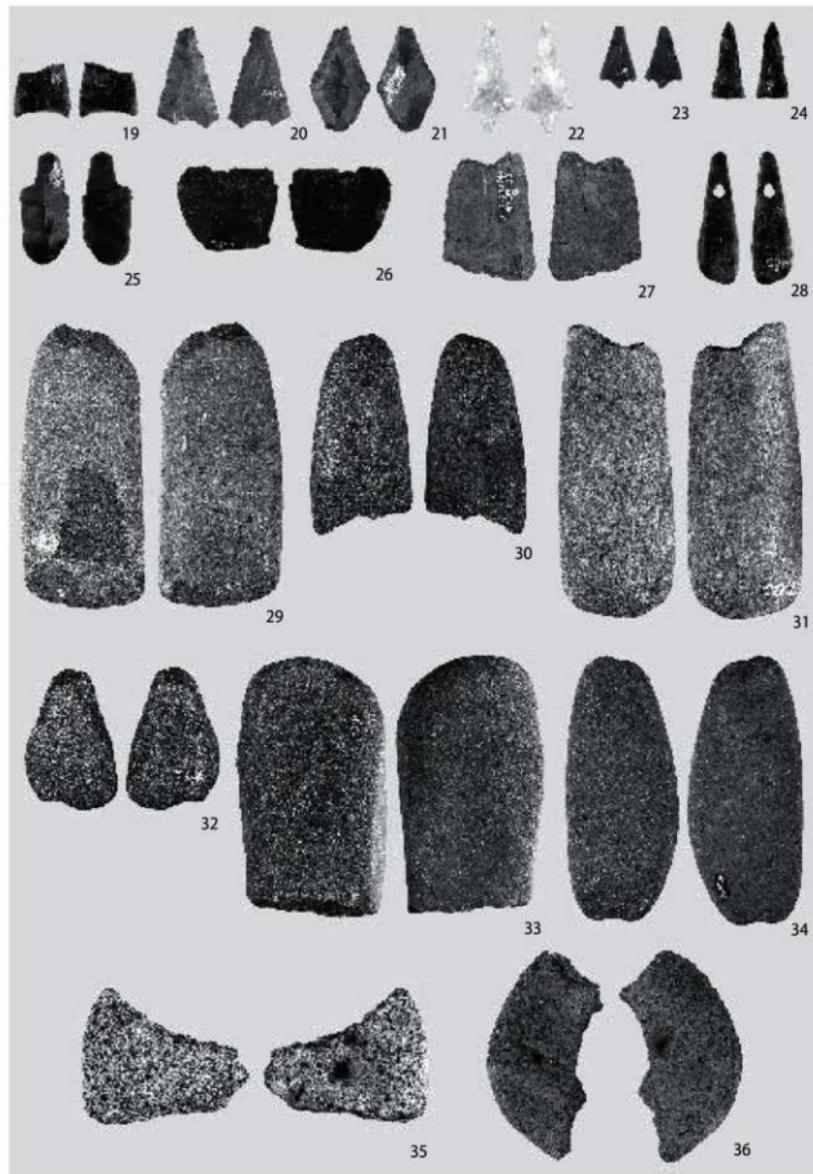
遺構外出土縄文土器（1）



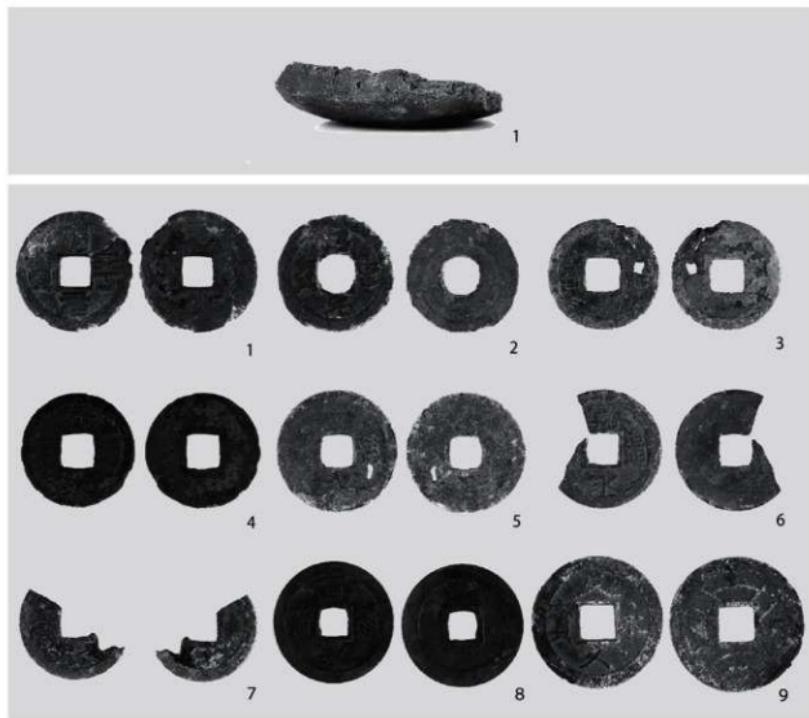
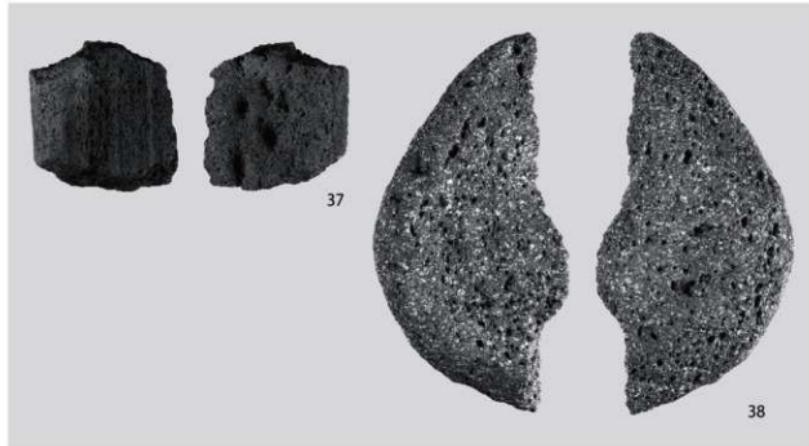
遺構外出土縄文土器（2）



遺構外出土縄文土器（3）・石器（1）



遺構外出土石器（2）



遺構外出土石器（3）・土師器・錢貨

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第 699 集

柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書 5

—柏市原山遺跡—

縄文時代以降編

平成 25 年 3 月 25 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文 化 財 セ ン タ 一

発 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町 1-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町 1397
